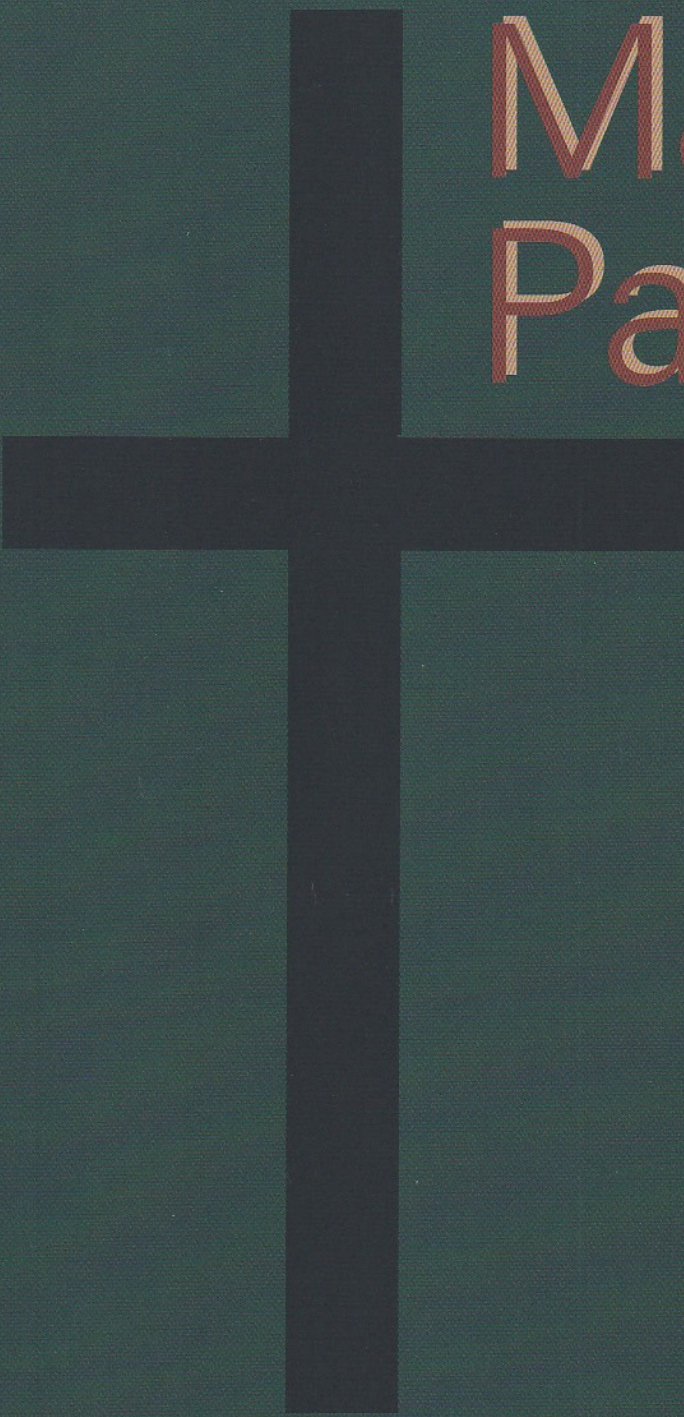




Markus Passion

BWV106

BWV79

BWV105

BWV247

“Markus Passion”

ごあいさつ

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

代表 渡辺 信之

1年の中で最も寒さの厳しいこの時期、東北の中でもとりわけ寒い、ここ盛岡での「マルコ受難曲演奏会」に、本日は皆さま良くおいでくださいました。誠にありがとうございます。

「J.S. バッハの教会カンタータの研究と演奏を通して音楽芸術を追求する」を目的としている盛岡バッハ・カンタータ・フェラインではありますが、いつも練習や演奏会でカンタータばかりを取り上げているわけではありません。

本日演奏いたしますカンタータは、昨年4月から練習が始まりました。最初6曲ほどのカンタータを、とりあえず片端から声を出して歌ってみました。その中から3曲が残り、その後198番のカンタータが加わりました。毎年恒例行事として開催している安比高原での「夏合宿」時に、この198番カンタータをベースとして「マルコ受難曲」に発展させる企画がまとまって、本格的な練習を開始し、本日の演奏会に至っております。

さらに今回は、大半のソリストをわがフェラインのメンバーから立てています。毎週の練習で常に顔を合わせている仲間が大半ですが、遠くドイツから本日の演奏会のために飛んで来てくれたメンバーもいます。これだけたくさんのソリストを団内からまかなうのは、1996年の「バッハの夕べ」演奏会以来のこととなります。

当合唱団フェラインがカンタータの演奏会を行う時、その多くにお付き合いいただいているのが、本日も一緒する東京バッハ・カンタータ・アンサンブルの皆さまです。前回は、フェラインが満25年を迎えた時に行った演奏会で、39番カンタータ他、全部で3つのカンタータを共演していただきました。今回はさらに、ヴィオラ・ダ・ガンバ、リュート、リコーダー等、普段ステージではあまりお目にかかれない楽器も登場し、さまざまな音色と、音量のダイナミックレンジに富んだ演奏をお楽しみいただけます。

そして、本日の演奏会で看板となっているマルコ受難曲は、198番カンタータを元にして、さらに指揮者佐々木正利先生の考証により構成されたものですので、今回の演奏が世界初演であることはもちろん、実際に生の演奏を行ったり聴いたりできるのは、最初で最後ということになりそうです。まさに、編曲者兼指揮者の佐々木先生とソリスト、オーケストラの皆さま、そして合唱団員のわれわれと聴衆の皆さまとの、文字通り一期一会のステージということですよ。

一昨年の、H. ヴインシャーマン指揮マタイ受難曲演奏会盛岡及び東京公演を終えて、昨年1年はフェラインの充電期間と捉え、本日の演奏会の企画と練習に取り組んでまいりました。この後は、4月のロルフ・ベック指揮シュレスヴィヒ・ホルシュタイン・アカデミー合唱団との共演、12月はゲアノー・シュマルフス指揮によるドイツ公演が予定されており、今年は賑やかな年となる予定です。

このたびは、各方面から多大なご理解ご協力、東京バッハ・カンタータ・アンサンブルのメンバーの共演ご快諾、そして何より聴衆の皆さまの暖かいご支援によって本日を迎えることができました。皆さまの期待に背かぬよう精一杯歌ってまいりますので、どうぞ心行くまでお楽しみください。

今後とも盛岡バッハ・カンタータ・フェラインをお引き立ていただきたく、どうぞよろしくお願い申し上げます。

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン マルコ受難曲演奏会



J.S. バッハ Johann Sebastian Bach

カンタータ第106番 神の時は最良の時

BWV106 Gottes Zeit ist die allerbeste Zeit

カンタータ第79番 神、主は太陽であり盾

BWV79 Gott, der Herr, ist Sonn und Schild

カンタータ第105番 主よ、あなたの僕を裁きにかけてください

BWV105 Herr, gehe nicht ins Gericht mit deinem Knecht

マルコ受難曲

BWV247 Markuspassion

《独唱》

【ソプラノ】

藤崎 美 苗 (マルコ受難曲、カンタータ106番)

小野寺 貴子 (カンタータ105番)

田村 いずみ (カンタータ79番)

渡 邊 絵 美 (カンタータ105番)

【アルト】

佐々木まり子 (マルコ受難曲、カンタータ106番)

菊 池 葉 子 (カンタータ79番)

谷地 畝 晶子 (カンタータ105番)

多 田 繭 子 (カンタータ105番)

【テノール】

中 村 洋 (カンタータ105番、106番)

鏡 貴 之 (マルコ受難曲)

西野 真史 (カンタータ105番)

【バス】

小 原 一 穂 (カンタータ105番、106番)

千 田 敬 之 (カンタータ106番)

佐々木 直樹 (マルコ受難曲、カンタータ79番)

藤 村 誠 毅 (カンタータ105番)

《指揮》

佐々木 正利

《管弦楽》

東京バッハ・カンタータ・アンサンブル

《合唱》

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

2005.1/30 岩手県民会館大ホール

主 催/盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

後 援/岩手県教育委員会、盛岡市教育委員会、岩手県文化振興事業団、盛岡市文化振興事業団
岩手県合唱連盟、岩手日独協会、NHK盛岡放送局、岩手日報社、盛岡タイムス社、情報紙游悠

出演者プロフィール



佐々木 正利
〈指揮〉

東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士及び博士後期課程修了。須賀靖元(声楽)、服部幸三(音楽学)、小林道夫(演奏法)、森品彦(発声法)、松本民之助(作曲)、岳藤豪希(宗教音楽)の各氏に師事。1973年にバッハ「クリスマス・オラトリオ」福音史家で楽壇デビュー以来、バッハをはじめとする宗教音楽のスペシャリストとして揺るぎない地位を得ている。

79年シュトゥットガルトに渡り、L.フィッシャー教授に師事。80年第6回ライプツィヒ国際バッハ・コンクール声楽部門第5位入賞。同年より82年までデットモルト北西ドイツ音楽大学に学び、H.クレッチマル教授に師事。在独中は欧州各国の演奏会に招かれ、特に80年ウィーン楽友協会ホールでのマタイ受難曲では「若き日のP.シュライヤー」と新聞各紙で絶賛される。

帰国後もライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、ベルリン交響楽団、国立ブカレスト交響楽団、NHK交響楽団等々、世界、日本の著名なオーケストラのソリストとして度々起用され、K.マズア、H.シュタイン、H.プロムシュテット、小澤征爾、岩城宏之等、世界を代表する数々の指揮者と共演。また世界的宗教音楽の名指揮者であるH.リリング、H.J.ロツチュ、M.コロボ、R.ヤコブス等率いる、シュトゥットガルト・バッハ合奏団、ゲヒンゲン聖歌隊、聖トマス教会聖歌隊、RIAS室内合唱団等の演奏会に度々出演し、高い評価を得ている。特に世界的バッハ指揮者H.ヴァインシャーマン率いるドイツ・バッハゾリステンの演奏会には、ソリストとしてだけでなく、自身が育てた合唱団も度々共演し、その歌唱力、合唱指導力によって絶大な信頼を勝ち得ている。85年ザルツブルク音楽祭に招かれ、R.バーダー指揮のモーツァルト管弦楽団、ベルリン聖ヘドヴィッツ聖歌隊とバッハ「マニフィカト」、モーツァルト「戴冠ミサ」を共演、絶賛を博した。在独中はヴェストファーレン州立歌劇場等で「グリゼルダ」のコラード、「フィデリオ」のヤッキーノ、「コジ・ファン・トゥッテ」のフェランド役で出演。現在までリサイタル21回を数え、レコード・CDも多数リリース、またテレビ、FM等にも度々出演している。

70年東京芸大バッハ・カンタータ・クラブの創設に携わり、多くの後進を育てるとともに指揮者としての活動を開始。以後、約30年にわたって主に宗教曲の演奏に冴えをみせ、そのいずれもが名演の誉れ高い。特に盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハ・カンタータ協会等を率いての10度にわたるドイツ等を中心とした欧州公演では、『シュツ、バッハの世界的担い手』とした最大級の賛辞が新聞各紙に掲載され、93年のヴァインシャーマンとのマタイ受難曲では『マタイ演奏史上、最も特筆されるべき演奏の一つ』、また95年のJ.ツィルビとの天地創造では『音楽と言葉の見事なまでの融合』と、その音楽作りが絶賛された。87、88年には、リリング音楽監督のバッハ・アカデミーにてTen.マスタークラスの講師を務め、またコダーイ・サマースクールや古楽サマースクール等でも指導講師に招かれるなど、その指導力については世界的に定評がある。

94年、長年にわたる顕著な演奏・教育の業績に対し、第47回岩手日報文化賞(学芸部門)が贈られ、また00年8月にはアメリカ・イオンド大学より名誉博士号が授与された。

現在、岩手大学教育学部教授。二期会会員。日本国立大学協会全国音楽部門大学部会副部会長。日本声楽発声学会理事。日本発声指導者協会常任理事。仙台バッハ・アカデミー理事。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン指揮者。仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハ・カンタータ協会、オーケストラ・アンサンブル金沢合唱団、21合唱団(東京)、岩手大学合唱団、東北大学混声合唱団、各指揮者。二期会バッハ・バロック研究会講師。グルッペ・ベッヒライン会員。

出演者プロフィール《声楽》



藤崎 美苗 〈ソプラノ〉

岩手大学教育学部中学校教員養成課程音楽科卒業、東京芸術大学大学院修士課程独唱専攻修了。声楽を佐々木まり子、佐々木正利、瀬山詠子、朝倉蒼生、野々下由香里、ベーター・コーイの各氏に師事。第10回友愛ドイツ歌曲コンクール第2位入賞。これまでにJ.S.バッハの教会カンタータ、「マタイ受難曲」、「ヨハネ受難曲」、「ミサ曲短調」、「クリスマス・オラトリオ」、ヴィヴァルディ「グローリア」、モーツァルト「レクイエム」、フォーレ「レクイエム」、サン・サーンス「レクイエム」などの宗教曲でソリストを務める。現在東京芸術大学古楽科在籍中。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員。バッハ・コレギウム・ジャパン声楽メンバー。



小野寺 貴子 〈ソプラノ〉

岩手大学教育学部中学校教員養成課程音楽科卒業、東京芸術大学大学院修士課程独唱専攻修了。声楽を佐々木正利、三林輝夫氏に、発声を磯貝静江の各氏に師事。また、東京芸大バッハ・カンタータ・クラブ定期演奏会においてソロを務めるなど小林道夫氏の指導の下研鑽を積む。大学院在学中、東京芸術大学第47回オペラ定期演奏会『ドン・ジョヴァンニ』にツェルリーナ役で出演し好評を博した。また、バッハ・コレギウム・ジャパンのメンバーとして日本各地での演奏活動、海外公演にも参加。03年春、渡独。マンハイム音楽大学でA.ラミレス教授に師事、翌年デットモルト音楽大学に移り、R.ウェーバー教授に師事。現在同音楽大学在学中。04年、ライブツイヒのトーマス教会でライブツイヒ・バロックオーケストラとソロで共演。またオーディションに合格し、シュトゥットガルト・ゲヒンゲン聖歌隊のメンバーとしてH.リリングの下、ヨーロッパ各地での演奏に参加。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員。グルッペ・ベッヒライン会員。



田村 いずみ 〈ソプラノ〉

岩手大学教育学部小学校教員養成課程卒業。同大学院教育学研究科教科教育専攻音楽教育専攻修了。声楽を佐々木正利氏に師事。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、ソプラノパートリーダー。これまでに岩手大学合唱団定期演奏会や同海外公演（アムステルダム・コンセルトヘボウ）、仙台宗教音楽合唱団演奏会等で度々ソロを受け持ち好評を博す。グルッペ・ベッヒライン会員。



渡邊 絵美 〈ソプラノ〉

青森県立青森高等学校、岩手大学教育学部学校教育コース中学校教員養成課程卒業。現在、岩手大学大学院教育学研究科教科教育専攻音楽教育専攻在学中。声楽を佐々木正利氏に師事。2004年「春期国際声楽アカデミー」にてA.ラミレス氏の公開レッスンを受講。また「100人のための箏コンサート宮城道雄の世界“秋”」にて、「秋の調べ」のソリストを務めた。日本声楽発声学会会員。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、ソプラノサブパートリーダー。



佐々木 まり子 〈アルト〉

東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士課程独唱専攻修了。毎日学生音楽コンクール西日本1位。NHK新人演奏会出演。伊藤亘行、小林道夫、森品彦の各氏に師事。1980年にデットモルト北西ドイツ音楽大学に留学し、H.クレッチマール、H.クルマン両教授に師事。ドイツ・リート、オラトリオ歌唱法ならびにドイツ語舞台発音法の研鑽を積む。その間、北ドイツにおいてバッハを中心とした宗教音楽演奏会に数多く出演。ヒルデスハイムにおける「アルト・ソロ・カンタータ」、ミュンスターにおけるC.P.E.バッハの「マニフィカト」は新聞紙上で絶賛される。帰国後も、H.ヴィンシャーマンとの共演をはじめ、「マタイ」「ヨハネ」両受難曲、「短調ミサ」「クリスマス・オラトリオ」、多数のカンタータ、ヘンデル、メンデルスゾーン、ベートーベンの「第九」などオラトリオのソリストとして演奏活動を行っている。現在、女声合唱団・グレイセスもりおか、アンサンブル・コン・フォーコ指揮者。岩手大学合唱団、東北大学混声合唱団各ヴォイス・トレーナー。また月が丘教会のチャペルコンサートを長年企画、指揮している。グルッペ・ベッヒライン会員。



菊池 葉子 〈アルト〉

岩手県立水沢高等学校、岩手大学教育学部小学校教員養成課程卒業、現在、同大学院教育学研究科教科教育専攻音楽教育専攻在学中。声楽を佐々木正利氏に師事。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員。同合唱団の、シュツ「十字架上の七つの言葉」でソロを務める。また、現在アルトパートリーダー。



谷地 畝 晶子 〈アルト〉

岩手県立盛岡北高等学校、岩手大学教育学部芸術文化課程音楽コース卒業。現在、東京芸術大学音楽学部声楽科1年在学中。声楽を佐々木まり子、佐々木正利、朝倉蒼生の各氏に師事。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員。



多田 繭子 〈アルト〉

福島県立福島西高等学校卒業。岩手大学教育学部芸術文化課程音楽コース2年在学中。声楽を松本美香、佐々木正利の各氏に師事。岩手大学合唱団団員。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員。



中村 洋 〈テノール〉

東北大学経済学部卒業。東北大学混声合唱団学生指揮を務め、現在仙台宗教音楽合唱団コンサートマスター。同団の演奏会にてバッハのカンタータ4番、131番、155番等におけるテノールソロ等を度々担当し、その端正な歌唱で定評を得ている。仙台バロックアンサンブルに所属。仙台市職員。



鏡 貴之 〈テノール〉

岩手県立盛岡第三高等学校卒業、岩手大学教育学部芸術文化課程音楽コース卒業。この春から東京芸術大学大学院独唱専攻に進学予定。声楽を佐々木まり子、佐々木正利の両氏に師事。2003年にハイドン「十字架上の七つの言葉」のテノールソロでデビュー。その後、04年12月にベートーヴェン「第九」のソリスト、バッハ「クリスマス・オラトリオ」(全曲)の福音史家・アリアを務め好評を博す。現在、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、テノールパートリーダー。02年、岩手大学合唱団チーフコンダクター。日本発声学会会員。グルッペ・ベッヒライン会員。輝かしく伸びやかな美声を持ち、将来を嘱望されているテノールである。



西野 真史 〈テノール〉

岩手県立盛岡第一高等学校卒業、岩手大学教育学部芸術文化課程音楽コース2年在学中。声楽を佐々木まり子、佐々木正利の各氏に師事。グルッペ・ベッヒライン会員。岩手大学合唱団団員。



小原 一穂 〈バス〉

岩手大学教育学部中学校教員養成課程音楽科卒業、東京学芸大学大学院修士課程修了。森肇子、今関由紀子、中村義春、移川澄也、佐々木正利、P.フッテンロッハーの各氏に師事。ミサ、カンタータ、レクイエム、オラトリオ、受難曲等の宗教曲をはじめ「第九」、「森の歌」等の演奏会のソリストとして多数出演する一方、創作オペラ、音楽劇の主要キャストを務め好評を得ている。盛岡市等でリサイタル開催。グルッペ・ベッヒライン会長。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン第一コンサートマスター。盛岡市立城西中学校勤務。



佐々木 直樹 〈バス〉

岩手大学教育学部中学校教員養成課程音楽科卒業後、東京芸術大学声楽科を経て、同大学院修士課程独唱専攻修了。小原一穂、佐々木正利、佐々木まり子、伊藤亘行、多田羅迪夫の各氏に師事。これまでに、J.S.バッハのカンタータ、ミサ曲、クリスマス・オラトリオ、ヨハネ受難曲、ヘンデル、サン・サーンス、モーツァルト等の宗教曲を中心にソリストとして活動している。2001年芸大定期メンデルスゾーン「エリア」、02年芸大メサイアでソリストを務める。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員。グルッペ・ベッヒライン会員。



千田 敬之 〈バス〉

神奈川大学経済学部経済学科卒業。岩手大学大学院教育学研究科教科教育専攻音楽教育専修修了。声楽を佐々木正利氏に師事。神奈川大学合唱団在籍中、多田武彦作曲「尾崎喜八の詩から・第二」初演ソリストをつとめる。第1回スーパー・クラシック・オーディション東北大会出場。釜石フィルハーモニックソサイエティーとの共演で「カルミナ・ブラーナ」バリトンソロをつとめる。岩手県芸術祭、盛岡市芸術祭に参加。現在、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン会員。グルッペ・ベッヒライン会員。



藤村 誠毅 〈バス〉

岩手県立盛岡第三高等学校卒業。岩手大学教育学部学校教育教員養成課程小学校教育コース音楽サブコース4年在学中。声楽を佐々木正利氏に師事。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、バスサブパートリーダー。岩手大学合唱団団員、グルッペ・ベッヒライン会員。

※

※

出演者プロフィール



蒲生 克郷〈管弦楽コンサートマスター〉

東京芸術大学卒業。1976-78年渡独。ヒルデスハイム室内管弦楽団コンサートマスター等を務める傍ら、ヴェルツブルク音楽大学にて研鑽を積む。帰国後は憩弦楽四重奏団、久合田緑弦楽四重奏団などで活躍する。

現在、東京芸術大学管弦楽研究部講師、及び同部(芸大フィルハーモニア)コンサートマスター、エルデーディ弦楽四重奏団第一ヴァイオリン奏者、アンサンブル of トウキョウメンバー。多久興、海野義雄、ボリス・ゴールドシュタインの各氏に師事。

東京バッハ・カンタータ・アンサンブル〈管弦楽〉

東京芸術大学の学内サークルとして30年来小林道夫氏のもとで活発な活動を続けている団体に「バッハ・カンタータ・クラブ」というのがあがる、そのOBを中心に、卒業後もなおバッハやヘンデル等の器楽曲、宗教音楽の分野に於ける演奏活動を続けようとする有志が集ったのが「東京バッハ・カンタータ・アンサンブル」である。メンバーは各自がそれぞれソリスト、室内楽、オーケストラ等、各方面で活動しているため多少流動的ではあるが、この名称のもとで演奏活動を始めてから既に20年を経て、バッハ、ヘンデルを中心としたバロックの器楽曲、宗教音楽の数少ない演奏研究団体として、その様式感にのっとった生き生きとした演奏には定評がある。

過去に於いては、W.ヤーコプ、H.ヴィンシャーマン、E.ヴァイアント、H.J.ロッツェ、P.ノイマン、小林道夫、黒岩英臣等、内外の演奏家との共演をはじめ、バッハ合唱団、CMA合唱団等、全国各地の合唱団と共演している。



盛岡バッハ・カンタータ・フェライン〈合唱〉

1977年「カンタータを歌う会」として発足。以来、一貫してJ.S.バッハの作品を中心としたドイツ・バロック合唱曲の研究、演奏を行っている。その演奏が、1991年ドイツにお

いて「作品の語感、音、そして精神の完熟」という現地新聞の批評を受けるに至るまでには指揮者、佐々木正利のドイツ・バロック音楽に対する卓越した見識に基づく、熱意溢れる指導の積み重ねがあった。佐々木は超一流のエヴァンゲリストとして評価されるその発音、語感、様式感をもう一つのライフワークである合唱団の育成に注ぎ込み、その結果「〈言葉が生きる〉と〈音楽が生きる〉とは歌の世界では同義語である」というフェラインの音楽信条が演奏上の身上となるに至ったのである。

その後、H.ヴィンシャーマン、H.J.ロッツェ、J.ツィルヒ、岩城宏之等、世界的指揮者との共演を重ね、各指揮者より、ドイツ・バロック音楽を音楽的かつ人間的に表現できる合唱団として、熱い評価を得るようになった。この評価は、声の充実を追求する合唱団や、古楽器的な歌唱法を駆使して鮮烈な表現を目指す合唱団に与えられるものとは性格を異にする。暖かい音色を基調としながら、音楽の刻々と変化する様相を、その時々に対応しいニュアンスで大胆かつ繊細に、確信を持って表現しきろうとする、あくまで人間バッハへの共感を基調とする合唱団に対してのものなのである。

ミュンヘンのヘラクレスザールでハイドンの「天地創造」を演奏する(ニュルンベルク交響楽団)同じ週に、各地教会でア・カペラの小品を歌う。フェラインは、常に盛岡の教会での練習で培ったトーンを原点として活動してきた。

02年10月には盛岡で、D.ティム指揮のライブツィヒ・バロックオーケストラと、バッハの「カンタータ45番」、ヴィヴァルディの「グローリア・ミサ」を演奏し絶賛を博した。また、一昨年11月には盛岡、12月には東京で、それぞれH.ヴィンシャーマン指揮のドイツ・バッハゾリステンと、バッハの「マタイ受難曲」を演奏し、大きな感動を呼んだことは記憶に新しい。

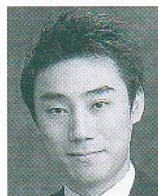
東京バッハ・カンタータ・アンサンブルとの共演は、02年のフェライン25周年記念演奏会以来3年ぶり。

出演者プロフィール《オーケストラ》



花崎 淳生 〈第一ヴァイオリン〉

東京芸術大学を経て同大学院修了。1986年から87年にかけて、ドイツ、カールスルーエに留学。97年度「村松賞」を古典四重奏団として受賞。現在「エルデーディ弦楽四重奏団」「古典四重奏団」「アンサンブルB WV2001」メンバー、東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校非常勤講師。エルデーディ弦楽四重奏団よりハイドン作品のCDを、古典四重奏団より「ベートーヴェン後期四重奏曲集」「バッハ・フーガの技法」「モーツァルト・ハイドンセット」等のCDをリリース。また、古典四重奏団として03年よりavex-CLASSICSの専属アーティスト。井上武雄、日高毅、J.W.ヤーンの各氏に師事。



高木 聡 〈第一ヴァイオリン〉

東京芸術大学音楽学部器楽科卒業。これまでにヴァイオリンを岡山潔、和波孝禧、塚原るり子の各氏に、室内楽を小林道夫、金昌国の各氏に師事。第九回全日本ソリストコンテストにてベストソリスト賞受賞。04年3月にはリサイタルを行い、好評を博す。現在東京芸術大学管弦楽研究部講師。



吉田 篤 〈第一ヴァイオリン〉

山口県出身。山口県学生音楽コンクール金賞及びコンクール大賞受賞。全日本学生音楽コンクール福岡大会第1位。オホーツク音楽祭、リゾナーレ音楽祭、防府音楽祭等に出演。これまでにヴァイオリンを石井志都子、ヴィオラを菅沼準二、室内楽を松原勝也、楽理を土田英三郎の各氏に師事。また、芸大バッハ・カンタータ・クラブに所属し小林道夫氏の指導を受ける。東京芸術大学音楽学部楽理科を卒業。現在、同大学院室内楽科ヴィオラ専攻に在籍。



海保 あけみ 〈第二ヴァイオリン〉

松本市出身。3才よりヴァイオリンを始める。東京芸術大学音楽学部卒業。ヴァイオリンを片岡世界、正岡紘子、山岡耕作、日高毅の各氏に、室内楽を黒沼俊夫、日高毅の各氏に師事。在学中、芸大バッハ・カンタータ・クラブに在籍し小林道夫氏の指導を受ける。現在フリーの演奏家として、室内楽、オーケストラ、スタジオ等の分野で活動中。



大谷 美佐子 〈第二ヴァイオリン〉

東京芸術大学卒業。1987年新潟県八海山山頂で、フルート奏者小出信也氏とデュオコンサートを行う。89年IMAS交響楽団と共演。90年ボストンでロマン・トーテンベルク、ペーター・ザゾフスキー各氏の指導を受け、ロンジ音楽院にてリサイタルを行う。91年第105回神奈川県立音楽堂推薦音楽会に出演。92年、95年横浜で、99年王子ホールでリサイタルを行う。(故)井上武雄、浦川宜也、瀬川光子の各氏に師事。東京電機大学管弦楽団、茅ヶ崎弦楽合奏団、戸塚区民オーケストラ、との共演など、現在、フリーでソロ、室内楽と活動中。イリス弦楽四重奏団メンバー。



長岡 聡季 〈第二ヴァイオリン〉

東京芸術大学音楽学部付属高校、同大学院を経て、同大学院室内楽科修士課程修了。これまでに富士山麓国際音楽祭、リゾナーレ音楽祭他に出演。また学内では、芸大室内楽定期に3度選ばれて出演。東京芸術大学室内楽科の助手を勤める。現在は、ソロ、室内楽を中心に活動中。ヴァイオリンを、磯恒夫、高橋孝子、大谷康子、若松夏美、岡山潔の各氏に師事。



深沢 美奈 〈ヴィオラ〉

1993年第3回日本室内楽コンクール入選。95年東京文化会館新進音楽家デビューコンサート出演。97年東京文化会館小ホールにてヴィオラジョイントリサイタルを開催。同年東京芸術大学大学院修了。これまでに、中馬敬子、浦川宜也、河合訓子、菅沼準二の各氏に師事。



幡谷 久仁子 〈ヴィオラ〉

東京芸術大学及び大学院、ドイツ・ハノーファー音楽大学修了。菅沼準二、故浅妻文樹、Hatto Beyerleに師事。日本女子大学附属高等学校非常勤講師。主にアンサンブルを中心に活動。



花崎 薫 〈チェロ〉

1979年、東京芸術大学在学中、DAADドイツ学術交流会給費留学生として、ベルリン芸術大学に留学。81年同大学卒業後、東京芸術大学に復学。東京芸術大学在学中、安宅賞受賞。81年、第50回日本音楽コンクール、チェロ部門3位入賞。86年、文化庁在外研修員として、ドイツ、カールスルーエ音楽大学に留学。89年、エルデーディ弦楽四重奏団を結成、01、03年には、ドイツ、フランス公演を行うなど、意欲的に、活動している。また、日本音楽コンクールをはじめ、主

要なチェロコンクールの審査員も務めている。現在、新日本フィルハーモニー交響楽団首席チェロ奏者、東京芸術大学、武蔵野音楽大学非常勤講師。堀江泰氏、エバーハルト・フィンケ、マーティン・オースタータークの各氏に師事。エルダー・ディ・弦楽四重奏団より、ハイドン作品のCDをリリース。



小貫 詠子 〈チェロ〉

都立芸術高校を経て東京芸術大学入学。在学中室内楽において松尾音楽財団より奨学金受与。大学の派遣においてウィーン音楽大学の室内楽セミナーへ参加。同大学卒業後同大学大学院修士課程入学。リゾナーレ音楽祭においてマイカル賞受与。大学院修士課程卒業後、ドイツ・アウグスブルグ大学へ入学。ディプロム卒業後Aufbaustudium入学。2002卒業、帰国。チェロを向山規矩子、河野文昭、金木博幸、マルクス・ワーグナー、マティアス・ランフトの各氏に師事。現在、埼玉県立大宮光陵高等学校音楽科非常勤講師。



蓮池 仁 〈コントラバス〉

東京芸術大学卒業。桑田文三、永島義男、J.リノヴィツキの各氏に師事。在学中は芸大バッハ・カンタータ・クラブにて小林道夫の指導を受ける。1990年東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団入団。現在に至る。これまでにH.リリング指揮日本バッハ・アカデミー、アフィニス夏の音楽祭、J・リフキン指揮バッハ・コンチェルティーノ大阪などに参加。アンサンブル音楽三昧、アンサンブルBWV2001各メンバー。



阿部 博光 〈フルート〉

1976年東京芸術大学入学。同年第45回日本音楽コンクールフルート部門入選。在学中、日本フィルハーモニー交響楽団に入団。80年東京芸術大学卒業。日本フィルでは首席フルート奏者を務める。82年文化庁芸術家在外研修員として、スイス、バーゼルに留学。84年より東京で10年連続リサイタルを開催、好評を博す。95年、17年間在団した日本フィルを退団。98年札幌市民芸術祭大賞受賞。99年より札幌コンサートホールにて阿部博光室内楽シリーズを開催。02年札幌文化奨励賞受賞。現在、北海道教育大学岩見沢校教授。同大学札幌校、札幌大谷短期大学の非常勤講師。HBCジュニアオーケストラの常任指揮者。



阿部 礼奈 〈フルート〉

中学入学時より父の手ほどきでフルートを始める。2000年3月、第25回STV青少年音楽コンクールSTV賞受賞。同年11月、第54回全日本学生音楽コンクール フルード部門中学校の部全国大会第1位。02年8月第8回浜松国際管楽器アカデミー&フェスティバルに参加、ペーター＝ルーカス・グラーフ氏に師事。同年11月、第56回全日本学生音楽コンクール 高校の部東京大会 奨励賞受賞。03年11月、第57回全日本学生音楽コンクール 高校の部東京大会 奨励賞受賞。同年12月、エマニュエル・バユ氏の公開レッスンを受講。同月、第13回日本クラシック音楽コンクール フルード部門 第2位(高校部門最高位)。現在、東京芸術大学音楽学部器楽科フルード専攻1年在学中、神田寛明氏に師事。これまでに阿部博光、八篠美奈子、細川順三、萩原貴子、高市紀子、金昌国の各氏に師事。



小畑 善昭 〈オーボエ〉

1975年東京芸術大学卒業、78年同大学院修了。第42回毎日音楽コンクール管弦楽部門第3位入賞。79年より82年まで東京交響楽団に在籍。のち85年まで西ベルリン留学。この間ベルリン・フィルハーモニー交響楽団のエキストラを務める。帰国後、新日本フィルハーモニー交響楽団首席オーボエ奏者を経て、現在母校の助教授として後進の指導に当たるとともに、独奏及び室内楽、また古楽器奏者としても活発な演奏活動を繰り広げている。



工藤 亜紀子 〈オーボエ〉

福岡県出身。13才よりオーボエを始める。福岡第一高校音楽科を経て、東京芸術大学音楽学部器楽科オーボエ専攻卒業。2001、02年度芸大室内楽定期出演。在学時より、在京オーケストラを中心に客演を務める他、室内楽、ソロ演奏など幅広い活動をしている。04年には木曽音楽祭に出演。



寺下 徹 〈ファゴット〉

立教大学文学部卒業後、東京芸術大学を経てミュンヘン音楽大学に留学。滞独中はミュンヘンの放送、歌劇場の主要オーケストラに客演の他、ミュンヘン・バッハ・オーケストラのメンバーとしてヨーロッパ各地を演奏旅行、幅広い体験を積む。帰国後は、在京、地方のオーケストラへの客演の傍ら、いくつかの大学で後進の指導に当たる。現在、各地の小・中・高校から大学、一般に至る幅広い層の合唱、吹奏楽、オーケストラの指導、育成にも力を注いでおり、2004年度第19回国民文化祭オーケストラの祭典での指揮者を務める。

など、指揮者としても活躍の場を広げている。ファゴットを三田平八郎、K.コルビンガーの両氏に、指揮法を石丸寛氏に師事。



大貫 広 (ホルン)

都立芸術高等学校音楽科及び東京芸術大学音楽学部器楽科にて学ぶ。千葉 馨、守山光三、山本 真、フーベルト・プラーデル、中川良平、小林道夫、伊達 良の各氏に師事。東京パッサ・カンタータ・アンサンブル、ジャパン・シンフォニアのホルン奏者としての活動のほか、アマチュアオーケストラの指導にも情熱を注ぎ、多くのオーケストラの指導育成にあたっている。



広川 実 (ホルン)

武蔵野音楽大学器楽学科ホルン専攻を卒業する。同大学の新人演奏会に出演する。第7回練馬区新人演奏会に出演する。2000年1月～04年12月まで東京シティフィルハーモニック管弦楽団に所属し現在フリーランスとして活動する。ホルンを伊藤泰世、ハインリッヒケラー、マックウィリアム、樋口哲生各氏に師事する。シンフォニアホルニステンメンバー。



福沢 宏 (ヴィオラ・ダ・ガンバ)

1988年、オランダのデン・ハーグ王立音楽院卒業。ヴィオラ・ダ・ガンバをヴィーラント・クイケン、室内楽をシグスヴァルト・クイケン、バルトルド・クイケン、ルーシー・ファン・ダールの各氏に師事。ソロ及び通奏低音奏者として栃木「蔵の街」音楽祭、福岡音楽祭、北とぴあ国際音楽祭、八ヶ岳高原音楽祭、サイトウ・キネン・フェスティバル、NHK・FMリサیتالなどに出演。全国各地で多彩な演奏活動を行っている。「パッサ・コレギウム・ジャパン」メンバー。東京芸術大学古楽科講師。



武澤 秀平 (ヴィオラ・ダ・ガンバ)

東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て現在同大学学部4年。これまでにチェロを崎野敏明、三木敬之、菊地知也、山崎伸子の各氏に、ヴィオラ・ダ・ガンバを福沢宏氏に師事。現在モダンチェロにおいてはソロ、室内楽の分野で活動、またヴィオラ・ダ・ガンバやバロックチェロなどの演奏にも力を注いでいる。



永田 平八 (リュート)

A.N.ジャズスクールを特待生で修了後、フランスのストラスブール国立音楽院を首席で卒業。CD「涙のパヴァーニ〜」ダウンロード・リュート曲集」ビデオ「古楽の魅力〜ルネサンス・リュート」をリリース。宮崎駿監督の映画「天空の城ラピュタ」、「もののけ姫」等でリュート演奏を担当するなど各方面で活躍中。また、演劇、ミュージカルの音楽監督、作曲家としても活躍し、平幹二郎氏によるシェークスピア全作品上演、ギリシャ悲劇等の音楽を担当している。



永田 斉子 (リュート)

国際基督教大学教養学部人文科学科卒業。フランスのストラスブール国立音楽院古楽科リュート科にてディプロマを取得。リュートを今村泰典、B.フィーハン、左近径介、音楽学を金澤正剛の各氏に師事。ルネサンス、バロック時代のリュート、ギターを用いてソロやアンサンブルで演奏活動を行っている。1999年にはスペイン・ヒホン古楽祭に招聘され演奏を行った。NHK-TV、FMの他、ビデオ「ルネサンスリュート」、映画「耳をすませば」などのために録音を行っている。リュートを中心としたサロンコンサートを企画する「ルミエールプロジェクト」を主宰。



古橋 潤一 (リコーダー)

桐朋学園大学古楽器科卒業、同研究科修了。リコーダーを花岡和生、山岡重治、吉澤実、濱田芳通の各氏に師事。ドルツィアンを堂阪清高、ヨセフ・ボラスの各氏に師事。室内楽を有田正広、本間正史、有田千代子、中野哲也、鈴木雅明の各氏に師事。第30回ブルージュ国際古楽コンクール入選。日本の主要古楽器アンサンブルのメンバーとして音楽祭、演奏会に出演。CDの録音にも参加している。また、1997年にはアントネッロ・エディトーレを設立、17世紀の楽譜の出版も手掛けている。現在、メディオ・レジストロ主宰。桐朋学園大学古楽器科講師。CD『メディオ・レジストロ』リリース。



向江 昭雅 (リコーダー)

国立音楽大学楽理学科卒業後、イタリアのミラノ市立音楽院古楽器科に留学。リコーダーを鯉沼広行、山岡重治、ベドロ・メメルスドルフ、音楽学を磯山雅、リコーダー製作を平尾重治の各氏に師事。現在は東京を中心に全国各地で活躍中。福岡古楽音楽祭、栃木「蔵の街」音楽祭など各地の音楽祭への出演、講師を務める。パッサ・コレギウム・ジャパンや新日本フィルハーモニー・オーケストラ等、ソリストとして国内の主要オーケストラへの出演多数。リコーダー・オーケストラ「デル・ソーレ東京」指揮者。NHK文化センター講師。CDに「フ

ランスのリコーダー・トリオ/レ・サンク・サンス』、『うぐいす/レ・サンク・サンス』などがある。<http://www.avanti.gr.jp/>



三上 恭伸 〈ティンパニ〉

宮古市出身。東京芸術大学音楽学部器楽科(打楽器専攻)卒業。卒業と同時に仙台フィルハーモニー管弦楽団に入団。現在に至る。尚絅学院大学・女子短期大学部非常勤講師。日本演奏連盟、日本吹奏楽指導者協会各会員。塚田靖、高橋美智子、有賀誠門の各氏に師事。



能登 伊津子 〈オルガン〉

桐朋学園大学音楽学部ピアノ科卒業。グレゴリオ音楽院オルガン本科卒業、同専攻科卒業。オルガンを鈴木雅明、岩崎真実子の各氏に師事。ダブルハープを西山まりえ氏に師事。1994年白川イタリアオルガン音楽アカデミーに於てピストイア賞受賞、翌年イタリアピストイアオルガン音楽アカデミーに招待される。同アカデミーに於てL.F.タリアヴィーニ、J.L.ウリオールの各氏に師事。98年スペイン政府より奨学金を得てダローカ国際古楽セミナーに参加。現在、ソリスト、通奏低音奏者として、数多くの演奏会、CD録音に参加している。メディオ・レジストロ、アンサンブルBWV 2001メンバー。CD『メディオ・レジストロ』リリース。



剣持 清之 〈チェンバロ〉

国立音楽大学卒業。チェンバロを西川清子、水野均の各氏に師事。1992年より盛岡パッハ・カンタータ・フェラインの伴奏者を務める。佐々木正利氏、岩城宏之氏、H.J.ロツチュ氏指揮の盛岡パッハ・カンタータ・フェライン演奏会、パリ・ユネスコホールでのH.ヴァンシャーマン指揮パッハ「ロ短調ミサ曲」などにおいて通奏低音を務める他、チェンバロリサイタル、デュオコンサート等近年各種演奏会においてチェンバロ、通奏低音奏者として活躍の場を広げている。盛岡大学短期大学部助教授。盛岡パッハ・カンタータ・フェライン伴奏者。グルッペ・ベッヒライン会員。



「好奇心と引っ込み思案とことんと」

佐々木 正利

まずはマルコではなくてマタイに関する話題を二題。

実は私は明日の朝、金沢へ向かって旅立ちます。今週末、オーケストラ・アンサンブル金沢(註1)の定期演奏会で、P.シュライアー(註2)の振り歌いで「マタイ受難曲」の演奏会があるからです。ご存知の方も多かろうと思いますが、私たちは一昨年暮れ、H.ヴァンシャーマン指揮ドイツ・バッハポリステンと、盛岡、東京等で「マタイ受難曲」をやりました。ヴァンシャーマン先生とは、もう何度共演戴いたかわからないほどのおつき合いをさせて戴いていますので、先生のお作りになるマタイが大体どのようになるのかは想像できました。というよりも、先生と私のスタイルが度あるごとに似通ってきて(こういう言い方は世界のマエストロ(註3)に対しては失礼ですね。正確には、私が先生の音楽に感化されて似てきたということ、そしてもちろんまだまだなのですが)下振りの私から先生へとパトントンタッチする時、合唱団員の戸惑いがほとんど見られなくなってきていました。

一方、シュライアーのマタイはまったく想像できません。彼のリートやオペラはよく知っていますし、またバッハをはじめとする宗教曲のソロについても、我々が世界の尊敬する第一人者ですから、参考にどころか何とか少しでも真似ができないものかとチャレンジしてきたものでした(はからずも、かつて1980年ウィーン楽友協会でのマタイの演奏会では「若き日のペーター・シュライアーを彷彿とさせた」と新聞各紙に書かれたものでしたが)。しかし彼が指揮をしているマタイは、確かCDは出ているようでしたが、最近音楽以外で忙しくしているのでそれを聴く時間はほとんどなく、いったいどんなマタイになるのか恐ろしくもわくわくしている自分がいます。一般的に、器楽奏者が指揮者になる場合にはカンタービレ(註4)を意識し、声楽家になる場合には、逆の弱点を意識してアーティキュレーション(註5)などを必要以上にたてる傾向がみられます。さればシュライアーは如何に？

結局、行き着く先は、過度のカンタービレをおさえて、言葉

をととても大切に作ること。言葉の抑揚やつながり、また和声の変化や転調等に敏感に配慮し、まさにほつれた糸を根気強く解きほぐし、それを端正に構築しなおす、ドイツリート(註6)の世界をイメージして音楽作りを進めているところです。

さて昨年の12月、千葉県は成田市(新東京国際空港のあるところ)での成田国際音楽祭で、3年振りにマタイのエヴァンゲリスト(註7)を歌いました。このマタイ、ソリストにかつて1980年旧東独ライブツィヒ(註8)で行われた国際バッハコンクールの入賞者を迎えてやることになったもの。従って、独唱者の平均年齢は54歳と、彼らのなかでは私が一番若いということになってしまいました。こうなると困るのは、うまく歌えなかった時に年のせいにできないこと。私、大抵の音楽会では一番ベテランの域に入ることの多かった昨今、不出来の言い訳を年のせいに頼る“情けなさ”が今回だけは使えません。大体にして昨秋二期会(註9)の演奏会でバッハを歌った時、共演した中村健理事長(優に70歳を越えていらっしゃるテノール歌手)が、「佐々木君、50代というのはあぶらが一番の時期だよ」と仰られて、見事な歌唱を披露されたのを横目に、内心大いに危機感を煽られていただけに、今回はそれこそ一世一代の勝負だと臨んだマタイ。さてその結果は如何に？

結局、行き着いたのは、常に新鮮に新しい発見を期待して歌うこと。50代の佐々木の、佐々木にしか歌えない個性に胸おどらせること。ただし、発声的には無理せず力まず、しかし楽をしない、をモットーに、エヴァンゲリストの役目を(そしてバッハの意図したところを十分に咀嚼して)余すところなく果たすことと心得、語りを中心に歌いきりました。そこには思わぬ副産物も。私、ドイツ語の発音とニュアンスには人一倍自信をもっていたのに、共演したパスのソリスト(A.ゾンマーフェルトさん。コンクール2位)に発音の不備を指摘されたのです。彼曰く、ほとんど正しいドイツ語に聞こえるけ

(註1) オーケストラ・アンサンブル金沢／1988年に創立された日本最初のプロの室内オーケストラ。創立以来、音楽監督に岩城宏之氏を迎え、世界中よりメンバーを公募し、多くの外国人を含む40名が在籍している。世界A級のレベル。

(註2) ペーター・シュライアー／1935年生まれのドイツを代表する今世紀最大のテノール歌手のひとり。その活躍の場は留まることを知らず、モーツァルトのオペラやシューベルトの3大歌曲集の演奏では他の追随を許さない。特にバッハの福音史家は演奏史上の規範となっている。近年は指揮者としても大活躍。

(註3) マエストロ／イタリア語(maestro)で「先生」「名人」の意。音楽界では優れた指揮者、指導者に対して「巨匠」の意でそう呼ぶ。

(註4) カンタービレ／イタリア語(cantabile)で「歌うように」を意味する楽語。メロディを美しく演奏するという指示。音楽用語は発祥、発展の由来からイタリア語が多い。

(註5) アーティキュレーション／英語、仏語(articulation)で、言語においては「音節を明瞭に区切って発音すること」をさす。音楽においては「1フレーズ内の旋律を、より小さな単位に区切り、それにある形と意味を与えること(例えばスタッカートに奏するとか、レガートに奏する、など)」をさす。

(註6) ドイツ・リート／ドイツ歌曲(Deutsches Lied)。広義には独唱曲に限らず合唱曲、或いは旋律性の強いピアノ曲(無言歌)などにもリートという名称を付すことがある。しかし一般的には、独唱用歌曲、それもピアノ伴奏、ドイツ語の詩をもったものを

れど、[r]の巻き舌が奥過ぎるのと、[ch]の軟口蓋の摩擦をもっと薄く上でするようにすればもっといいんじゃないか、と。彼はまた、20数年前（そう久方ぶりの再会でした）よりも声も表現も良くなってるんじゃない、とも。その瞬間、何がどう幸いし、禍いするかは本当に神様しかわからないことなんだ、とあらためて思ったものです。

話は変わりますが、先日、岩手大学の地域貢献派遣事業の一環として伺った盛岡市の“なつかしの唱歌”教室でのこと。それぞれ一代を成した（いやまだまだ途上の方も多くおられたと思いますが）ご高齢の方々に前に歌唱指導をやらせて戴いたのですが、そのどなたかが本当に生き生きとしたすてきな表情で歌っておられることにいたく感動しました。でも、“にわとりとたまご”のお話ではありませんが、この方々のお気持ちは、歌がお好きで、その歌をうたってここ和ませ、潤おされるのを期しておられるのか、或いはここを豊かに、ここをおどらせるために歌をうたうのかは、定かではありません（もちろん両方あり、ですが）。ただこのどちらにも属さず、人前で歌をうたうことは正直苦手だ、という方もこのなかにはおられたのではないかな……。そうなんです、この私でさえ、人前で歌をうたうなんて思ってもいかなかったことでした、と申しますとみなさん驚かれますか。その辺のところを、NHKの「おはよう日本」の担当アナ、高橋美鈴さんの談話（スポーツニッポン2004.12.18.付『女性アナリレー、サタデーメール』より）を引用してもうちょっと語ってみたいと思います。

高橋アナは、後輩学生からの「アナウンサーってどんな人が向いているんですか？」という質問に答えて、「そもそも私は声が小さく、子供の頃から引っ込み思案だった。人前で話をするのは今でもどちらかというと苦手だ。それでもこの10年ちゃん？アナウンサーを続けている。かえって少し

ぐらい引っ込み思案のほうが普通の人の感覚が分かるのではないかと勝手に思って、自分を励ましたりしている」と語り、続けて「だから最初から向き不向きを考え過ぎないほうがいいのではないかと話しています。そしてさらに、先輩として二つのアドバイスを付け加えるのです。一つは、好奇心を大事にすること。勉強でもサークル活動でも趣味でも何でもいい。さまざまなことに興味を持ち、多くの人と出会うこと。世の中では毎日いろんなことが起こる。アナウンサーになれば、そうした出来事を理解し、その意味を考え、自分の言葉として伝えなくてははいけない。その際、どんな経験をしてきたかが力になる、と。もう一つは、何かに夢中になってとことん取り組むこと。社会人になってぶつかるいろいろな壁、自分の力不足に悩んだり、仕事の責任の重さに押しつぶされそうになることもある。何かに懸命に取り組んだという自信がきっと支えになるだろう、と。

私は、この高橋美鈴さんの考えに大賛成です。何故ならば、私自身「引っ込み思案」と「好奇心」と「懸命な取り組み」で今までの人生をやってきた人間だからです。たとえば引っ込み思案。芸大に進学する前までの自分は、何かの議論に際して積極的に意見を言う方ではありませんでした。周りが意見するのを聞いているうちに、みなのが見えてきて自分の考えがまとまってくるのです。ですから私が発言する頃には大勢が決まり、私はまとめた意見を述べられるので結構かっこいい役回りを演じていました。それがです。ひょんなことから進んだ芸大では、こちらがじっとしていると、こちらには意見がないんだと思われて話がどんどん先に進むのです。これには焦りました。

好奇心のかたまりによって創部の立役者のひとりとなった芸大バッハ・カンタータ・クラブ。どうせびりっけつで入った芸大、何やったらって失敗は怖くないし4年後には故郷に帰るんだからと、新しいことに意欲を燃やして発起人に

さし、言葉の扱いや解釈、抑揚等を音楽に融合させ、詩と音楽のより強固で自由な結びつきを求めている。ピアノ伴奏も単なる和声の支え以上の意味をもたせられ、充実かつ独立した音楽として重要なパートを担っている。

(註7) エヴァンゲリスト／福音史家 (Evangelist)。受難曲やクリスマス・オラトリオなどで聖書（福音書）の記事を朗唱する人のこと。物語の場面や展開を正確かつ冷静に語り、全体の進行を司ることから、指揮者と同等の重要な役割を担う。テノールにあてられることが多く、流暢な語りや複雑な音程の跳躍、2オクターブに及ぶ音域と劇的な表現力などが求められることから、このパートの出来不出来が全体の成功に多大な影響を及ぼすこととなる。

(註8) ライプツィヒ／Leipzig。聖トマス教会カントールとしてバッハがその後半生を過ごした大学の町。マタイ、ヨハネの受難曲や多くのカンタータをはじめ、主要声楽曲の多くをバッハはこの地で作曲した。それを記念して4年に1回（現在は2年ごとに）国際バッハ・コンクールが開かれている。

(註9) 二期会／我が国を代表する声楽家の団体に、戦後の声楽復興・発展を目指し1952年に当時楽壇で活躍していた三宅春恵、川崎静子、柴田睦雄、中山佛一らによって設立。オペラの普及・発展に寄与しただけでなく、一線級の声楽家集団として、その会員に名を連ねることは名誉とされる。

名を連ねたこのクラブ。そこでの役職を決める話し合いで、それまで通り引込み思案に徹していたなら、私以外の方がポストについちゃった、その時の焦りは今でも鮮明に覚えています。盛岡だったならじっとしていると「お前がやれ」と言ってくれたのに、東京はそうじゃない。でも、このおかげでまたまた冷静に全体を見ることができたのです。そうすると、まためらめら好奇心が頭をもたげます。

芸大時代、何をやっていったら、そりゃあもうカンタータ・クラブですね。この活動を中心に私の世界は回っていました。今日のオケの母体となるカンタータ・クラブは今年創立35周年を迎えます。この間、沢山の熱心で優秀な声楽家、器楽奏者、指揮者、理論家を輩出してきました。このクラブに創設以来13年も所属していたのですから、先の高橋アナも、私の「何かに夢中になってとことん取り組む」姿勢を認定してくれるでしょう。そして高橋アナの意見通り「クラブに懸命に取り組んだという自信」がその後の私の支えとなったのです。

あまりにもカンタータ・クラブを一生懸命やりましたから、その頃の芸大には「バッハをやるなら佐々木」という風評が流れていました。これは大変うれしくもあり、また困ったことでもありました。芸大の定期演奏会で、来年こそは20年ぶりにマタイができるかもしれないぞ、だって佐々木がいるのだから、と声楽科と指揮科の先生方間でささやかれ始めたのです。確かにマタイはやりたい。しかも芸大定期で、20年前といえばエヴァンゲリストは柴田陸先生が務められたというのですから。私は、もし自分が声楽家として世に認知されとしたならバッハ歌手としてだろうな、とは思っていました。ところが、カンタータはとにかく何曲（難曲）もあるから、技術的に歌えないものは歌わなければ恥はかかないと思っておりました。しかし、です。世にバッハ歌手と認められるには少なくともマタイ、ヨハネの両受難曲、ロ短調ミサ、クリスマス・オラトリオのいわゆる4大宗教曲を歌えねばならない。

しかもこれらの曲はテノールにとっては難曲中の難曲なのです。私は、高音の「ラ」（階名）の音を出すのに四苦八苦していましたから、これらの曲のなかにある「変ロ」（音名）音やその半音上の「ロ」（音名）音をどうやって出すか、ついには頭を抱え込んでしまいました。芸大に佐々木あり、しかしてマタイを！。どうやってこの難局を乗り越えるか。どうやって「high c」（註10）ならぬ「high h」を克服するか。私の人生、お先真っ暗でした。

ここで話は最前のマタイにつながります。シュライアーのマタイも、50代のマタイも、「未知への憧憬」と「洞察的観察力」と「地道な工夫」から生み出されるもの。つまり初めてのマタイで、実現可能性確立10%未満の高音があり、しゃべりの難しさと曲数の多さ故の声楽体力への不安を抱えていた私が、如何にしてオーディション（註11）にパスするかは、ひとえにまずは歌えるか否かにかかっているという現実。この大きな障害を前にして、私は今につながる秘策を見つけたのです。そして、それはいつの間にか秘策でも何でもなく必然策に成り変わり、それを糧に、それがあから未だに音楽生活を送ることができている、といっても過言ではありません。

芸大マタイでは、何くそっ、やってやるぞ、との気持ちを絶やさずにアルバイトをしてはレコードを買い漁りました。いろんなマタイがあるのを知れば知るほど好奇心と興味が募り、貪るように新しいレコードを聴いたものです。そのうちあることに気づき始めました。エヴァンゲリストは必ずしもオペラのテノールのようにスピント（註12）をかけなくてもいい、リリックでも表現できるんだということでした。それから自分の声に似たテノールの搜索です。もっと単純に言いますと、自分でも真似できそうなテノール歌手はいないかな、という祈るような思いでレコードに針をおろすのです。そしてついに見つけました。自分の声はシュライアーに似ているとは思った

（註10） high c / テノール歌手の勲章である高音「1点ハ」音のこと。この音が出る、出ないで一喜一憂するテノールを、世は「テノールバカ」と揶揄する。ブッチーニの「ラ・ボエーム」の「冷たき手」や、ビゼーの「真珠採り」の「まだ聞こえるようだ」等が有名。

（註11） オーディション / 芸大では毎年1回、オーケストラ定期で合唱付きの曲を取り上げる。合唱は声楽科の学生が必修授業「合唱」でさらい迫力ある合唱を披露するので、この定期演奏会は人気がある。独唱者は在籍している大学院生のオーディションで決定されるが、レベルが高いので選ばれるのは難儀である。岩大出身者では、過去小原浄二、嶋海真希子（故人）、佐々木直樹、小野寺貴子らが独唱者に選ばれている。

けれどもとても真似はできないし、でもこの歌手なら声質は違うけれどちょっと工夫すれば、ちょっとイメージを修正すればできるかな、なんて思ったりして。ああ神様、感謝です、と思わずころのなかで叫んでいました。その歌手の名はT.アルトマイヤー。W.ゲンネンヴァイン指揮のもの(註13)でした。後にドイツに留学してから、このアルトマイヤーがドイツでどれほど有名なのかを知ることになるのですが。

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン(略称フェライン)は、再来年結成30周年を迎える市民合唱団です。そう、芸大マタイで私が四苦八苦していた頃、時をほとんど同じくして、未知、憧憬、希望をキーワードにして結成されました。最初の数年間は指揮者の私が東京に住んでいたこともあって、人数も10数名、練習はあたかも講習会のようなものでした。すなわち次から次へと新しいカンタータを音出ししていったのです。というのも何も演奏会を開くわけではありませんから、出来不出来に関係なくそれは本当の嗜好の世界、珠玉の作品の数々を楽しんでいったのでした。それはそれで幸せな時期だったと思います。その後私がドイツへ留学することもあって、本日のコンサートマスターを務めて下さる蒲生克郷氏に2年間指揮をお願いし、1982年私が岩大に赴任してから合唱団として本格的な歩みを始めることとなりました。

フェラインは1985年、すなわちバッハ、ヘンデル生誕300年、シュッツ生誕400年の記念の年に活動が最初のピークを迎えます。この年は何と1年間のスパンの間に、ヨハネ受難曲、メサイア英語版、メサイア独語版、シュッツのドイツレクイエムをやり、何と第1回目のドイツ演奏旅行まで敢行したのですから大したもの。これには大きな理由がありました。私が岩大に来てから2年目、3年目と、相次いで優秀で真面目な学生たち(註14)が入学してきて、彼らがフェラインをも盛り上げてくれたのです。それ以降、この伝統は脈々と受け継がれることになります。この年のメサイアでは、本日までとは

いきませんがソリストを7人立てています。そのなかに学生が3人いたというのは、メサイアの音楽的価値と難易度を考えると如何に出色の活動をしていたかがわかろうというものです。

巷間では、フェラインは歌える人たちを集めているからうまいのは当たり前という声が聞かれます。しかし私は声を大にしてこれに反論させて戴きたいのです。違うんです、声のよい人を集めたのでも歌える人を集めたのでもなく、もしフェラインが評価されたとしたなら、最初は何の音楽的技術も知識も経験もなかった人々が、一生懸命練習して育ったのだということが真実なんですよ、と。

本日は何とソリストを15人の者が担当しますが、そのなかで佐々木まり子さんと中村洋氏を除く13人は全員岩大出身で私の弟子たちです。それだけでなく、バックの合唱団のなかには、前に出ているソリストたちよりも上手なのがごろごろいます。確かにそれだけを表面的にみれば音楽家のたまごたちの寄せ集め集団的に思えるのでしょう。しかし私が誇りたいのは、そうした緊張して前に出ている独唱者たちをころから応援している会員(註15)の人たちの気持ちです。フェラインのすべての会員は、「好奇心=未知への憧憬」と「引っ込み思案=洞察的観察力」と「とことん=地道な工夫=懸命な取り組み」で固くその絆を結びあっているのです。普通の人々が普通に歌える一般合唱団、そして気持ちで歌う市民合唱団であるフェラインを誇りに思います。去年(2004年)はフェラインにとって不思議な年でした。結成当初はともかく、最近のフェラインではめずらしく1年間まったく演奏会がなかったのですから。でも他合唱団(仙台宗教音楽合唱団他)のドイツ演奏旅行に入ったり、岩手大学合唱団の定期演奏会を2回も(1月と2月)じっくり鑑賞できたりと、それはそれで実り多い年でもありました。そのなかでも、創立30周年の記念の年にやりたいと(ひそかに)思っている、私の大好きなオラトリオ、メンデルスゾーンの「パウロ」

(註12) スピント/テノールの声種分類用語。声の軽い方から、レジーエーロ、リリコレッジェーロ、リリコ、リリコスピント、スピント、ドラマティコと分類され、スピントは叙情性も持ち合わせながら強い表現力を持った声である。それに対してリリコ(リリック)は若く軽やかさがある声で、スピントほど声に劇性が求められない。

(註13) ヴォルフガング・ゲンネンヴァイン/中部ドイツのルーデヴィヒスブルク音楽祭の主宰で、H.リリングの先生でもある名バハ振り。彼のマタイでは福音史家をアルトマイヤーが務めているが、他のソリストたちは、ツィリス=ガーラ、ハマリ、ゲッダ、ブライ、クラス等、錚々たるメンバーが名を連ねている。

(註14) 1983年入学生/岩大に赴任して2年目、私が初めて担任した学年には、小原浄二(高知大学助教授)、佐々木朋也(不來方高校教諭)、小原育世(城南小学校教諭)、小原伸枝(高知大学講師)など、優秀で意欲のある学生たちが目白押しであった。

(註15) フェライン会員/盛岡バッハ・カンタータ・フェラインでは、合唱団員を「団員」とは呼ばず「会員」と呼ぶ。ドイツ語のVereinという名自体が「協会」という意であり、それを柔らかに解して「仲間」という連携を大切にしているからである。

を勉強できたことも貴重な糧となりました。一方、年が明けたこの2005年は、去年の反動ではありませんが演奏会が目白押しです。本日の演奏会を終えたあとは4月15日に、ドイツ合唱界の最重鎮R.ベック指揮シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン=アカデミー合唱団をお迎えし、ジョイント演奏会を開催致しますが(詳細は別掲)、そこでの演奏曲目(シューマン「流浪の民」他)の練習を開始しますし、また暮れも押し迫った12月末から正月にかけてフェラインとしては第5回目のドイツ演奏旅行を予定し、ヘンデルの「メサイア」他を携え、ミュンヘン等でバイエルン国立歌劇場管弦楽団(予定)と共演する企画も着々と進行中です。私たちは見た目の派手さとは裏腹に決して無理は致しませんし、明日からはまた全員が一線に並び新たな門出となりますので、是非みなさんも一緒に歌いませんか。フェラインは、会員のところが豊かになるような活動を常に目指す、そうした市民合唱団なのです。

今日はとても遠いところからも私たちの演奏を聴きにきてくださっております。名古屋からは、全日本合唱コンクール全国大会金賞常連合唱団「男声合唱団ケール・ジョワイエ」の常任指揮者で名古屋芸大名誉教授の高須道夫先生が、また金沢からは、オーケストラ・アンサンブル金沢合唱団コンサートマスター宮丸勝さんと、同ピアニスト鶴見彩さんがおいでです。高須先生は芸大の大先輩でまた家内の恩師でもあり、昨年暮れ名古屋で100人の第九(ソリスト、オケ、合唱全部で100人)を成功裡に導いてくださいました。また金沢のお二人は、私を強力にサポートしていい音楽作りとともに勤しむ仲間です。みなさん、引っ込み思案の私から好奇心を引き出してくださり、その実現に向けてとことん取り組む姿勢をバックアップしてくださるのです。全国、いや全世界どこにいても人間の思いと可能性を信じて音楽に邁進できることを、身をもって教えてくださるみなさまのためにも、

今日は、フェラインのルーツ、バッハの「カンタータ」を、ここを込めて歌います。最後まで、どうぞごゆっくりお聴きください。



鑑賞の手引き

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
コンサートマスター 佐々木 幹雄

本日演奏する楽曲は、今日では「教会カンタータ」と呼ばれている分野に属する曲です(ちなみにバッハ自身は「教会カンタータ」とは名付けず、「教会曲」「コンチェルト」とよんでいました)。バッハは約300曲の教会カンタータを作曲したと伝えられていますが、今日では200曲近くが残されています。

J.S.バッハ(1685-1750)の活動した時代、音楽史で言うところのバロック時代には、これらの曲は毎週日曜日の礼拝の一部として教会で演奏されていました。キリスト教プロテスタントの中でも特にルター派の教会では、教会に集う人たちの信仰を確かなものとするため、牧師の説教と同じくらい音楽の役割を重視しました。「説教音楽」ともいわれます。しかも17世紀から18世紀にかけてバッハが活躍したテューリンゲン地方ではルター派の伝統が特に強く守られ、教会での礼拝の際には必ずと言っていいほどカンタータが演奏されました。

これらカンタータは、その日の礼拝のテーマに沿った歌詞をもっています。多くの場合、詩人によって作られる宗教的な「自由詩」(その中には聖書の言葉が含まれることもあります)と、教会に集う人々が聴き・歌い慣れている賛美歌である「コラール」が組み合わされ、あるいは融合されてできています。バッハはそれらの歌詞に表されている情感(「アフェクト」といいます)を音の世界として表現し、会衆を歌詞の世界に導くと同時にその響きを神に捧げるべく作曲し演奏しました。

特別な機会には特別な礼拝がもたれました。特に、イエスの受難について思いをめぐらす聖金曜日(3月下旬から4月上旬頃)の礼拝では、受難をテーマにした「受難曲」が演奏されました。これは福音書に記述されている受難の物語を「レチタティーヴォ」という様式でソリストが語るように歌いながら、それぞれの場面での情感を自由詩としてアリアや合唱で歌ったりコラールとして歌ったりするもので、「オラトリオ風受難曲」と呼ばれる作曲様式に則っています。受難の物語は福音書により少しずつ異なっており、「マタイによる福音書」の言葉を使って作られた受難曲は「マタイ受難曲」、「マルコによる福音書」の場合は『マルコ受難曲』と呼ばれます。

教会カンタータや受難曲は、今日では楽譜が印刷・出版されており各地の演奏会で演奏されるようになりました。

バッハによって生みだされ私達に残された多くのカンタータは、どれをとっても人の心に響く音楽ばかりです。しかし元来、バッハの教会カンタータは礼拝という機会のために作曲されたものであり、中にはたった1回しか上演の機会がなかったというものもあります。本日は数多く残されたカンタータの中から3つのカンタータと1つの受難曲を演奏します。

《カンタータ第106番「神の時は最良の時」》

今日残されている筆写譜の表紙に書かれているタイトルから、別名《哀悼行事 Actus tragicus》とも呼ばれているこのカンタータはミュールハウゼン時代の1707年8月、親族の葬儀の際に初演されたと考えられています。バッハのカンタータにはめずらしく、旧バッハ全集出版以前の1830年にすでに出版されていました。歌詞作者は分かっていません。テーマとなっているのは「死」です。歌詞の前半では旧約聖書の言葉をもとに「掟としての死」が説かれ、後半では新約聖書による「救済としての死」へと捉えなおされる過程を表現しています。器楽編成はリコーダー2本と2つのヴィオラ・ダ・ガンバ、それに通奏低音という極めて特異な編成です。しかしこれによってこのカンタータのもつ古風ながら斬新な響きの世界がつくられています。

第1曲ソナティーナは死をテーマにしたカンタータの冒頭を飾るにふさわしい清浄な響きの世界を用意します。第2曲の合唱では我が身を神に委ねる至福を、生き生きとした「生」とおだやかな「死」の対比で表現します。続くテノールのアリオードでは途絶えがちな旋律を用いることで、命に限りがあることを嘆きます。すかさずバスが主の言葉を通して死への覚悟を厳しく求めます。すると合唱が契約としての死の厳しさを歌います。その時フーガの中からソプラノのアリオードが主イエスの到来を呼びかけます。この背後ではコラール「主よ、汝の内にわれは望む」の旋律がリコーダーによって演奏されています。そして最後にソプラノの呼びかけだけが響き渡って終わります。第3曲では、穏やかなアルトのアリアが「わが魂を神に委ねる」と歌うと、バスが十字架上的イエスの言葉をもって楽園を約束します。この背後からアルトによってシメオンの頌歌雅歌に基づくコラール「平安と歓喜もてわれは往く」が

重ねられ、死が受け入れられます。第4曲の合唱では、神をたたえるコラールから喜ばしいアーメンの二重フーガへと移り、最後にエコーを残して全曲が終わります。

《カンタータ第79番「神、主は太陽であり盾」》

1725年10月31日、宗教改革記念日用としてバッハが新作した唯一のカンタータです(旧作の転用は他にもあります)。1723年5月にライプツィヒの聖トマス教会のカントルとなったバッハは精力的にカンタータを新作し演奏していました。2年間ほとんど毎週のようにです。このカンタータが作曲されたのはその翌年次の終わり頃にあたります。歌詞作者はわかっていませんが、「主なる神の力強い護り」をテーマとしています。

第1曲の冒頭から力強くホルンが響きわたります。歌詞は詩篇第84篇第12節。人々が確信に満ちて主なる神を讃美し感謝を表す合唱です。第2曲のアルトのアリアでは、6/8拍子の中で、より個人的な立場から讃美と感謝と神に対する確信が歌われます。第3曲ではカンタータの冒頭で聴かれたホルンのテーマが響きわたる中、神への感謝を力強い4声体のコラールが共同体として歌います。第4曲はバスによるレチタティーヴォ。イエスへの感謝と揺るぎない信仰を語る言葉の中に、カトリックに対する抵抗の意識が込められています。続く第5曲では終始一緒に進行するソプラノとバスがユニゾンのヴァイオリンを伴って神の庇護を願い、敵に対する決意を歌います。終曲として3/4拍子の4声体のコラールが全奏の器楽とともにイエス・キリストの名を堂々と讃えて終わります。

《カンタータ第105番「主よ、あなたの僕を裁きにかけないでください」》

1723年7月25日、三位一体後第9日曜日の礼拝のために作曲されました。ライプツィヒに赴任してわずか2ヶ月ほどしか経っていない頃です。ちなみにバッハ38歳の夏です。これも歌詞作者はわかっていません。テーマは「最後の審判に対する恐れ」です。当日の礼拝ではルカによる福音書第16章第1～9節の「不正な管理人のたとえ」がテーマとなっており、主人の金を不正に管理していたことがば

れてしまった管理人が貧しい者へこの世の富を使ってほどこしをする(友達をつくる)ことで、この世の富が価値を失う時すなわち最後の審判の日に天に迎え入れられるだろうという教えに基づいています。

聖書の章句による合唱に始まりレチタティーヴォとアリアをいくつかはさみ最後にコラールで終わるという構成は、この時期の一連のカンタータの特徴となっています。第1曲は合唱です。前半のアダージョ部分ではため息のモチーフと掛留和音の積み重ねで「裁きにかけないでください。」と主に懇願し、後半のアレグロ部分ではフーガによって人の罪深い現実が告げられます。第2曲はアルトによるレチタティーヴォです。神の前に身をかがめて罪深いわたしの許しを乞います。第3曲では通奏低音による支えがなくなり、弦楽器は恐れに震え、オーボエがさまよう中でソプラノによるアリアが罪人の不安と恐れを歌います。第4曲では贖罪の意味をバスが歌います。そこでは十字架をかたどった音型と死の時を告げる鐘のような通奏低音が鳴り響いています。第5曲はテノールによるダ・カーポ形式のアリアです。この世で価値あるものとの決別を堂々と歌います。終曲は4声体のコラールですが、第3曲に現れた震えの音型で始まりしだいにリズムがゆったりとしていきます。このリズムの変化が「恐れ」から「希望」へと変化していくカンタータ全体の情感を集約的に表しています。

《マルコ受難曲》

バッハはその生涯で5つの受難曲を作曲したと伝えられています。しかし私達に音楽として残されたもの、つまり楽譜が現存するのは『マタイ受難曲』(BWV244)と『ヨハネ受難曲』(BWV245)のみです。BWV246と作品番号をつけられた『ルカ受難曲』という作品は作者不詳の他者作品(このような作品を「偽作」と呼んでいます)であることがわかっています。

では本日演奏する『マルコ受難曲』(BWV247)とはいったい何なのでしょう。これは1731年の聖金曜日にライプツィヒの聖トマス教会にて演奏されたことが各種の記録から知られており、歌詞だけは印刷されて残っていますが楽譜が消失してしまっている受難曲なのです。歌詞はマルコによる福音書第14,15章の受難記事と、それをもと

にピカンダー（本名はC. F. ヘンリーツィ。バッハの友人で『マタイ受難曲』をはじめ多くのカンタータの創作の際に協力し合っています）が作詩した自由詩によるレチタティーヴォとアリア、合唱、そしてコラルから構成されています。一方、音楽については、聖句の部分のレチタティーヴォや合唱、伴奏付きのレチタティーヴォなどは不明ですが、アリアや合唱の部分は歌詞の分析研究からカンタータ第198番『候妃よ、さらに一条の光を』というザクセン選帝候妃のための追悼音楽（通称「追悼頌歌 Trauerode」）からの転用が5曲あり、カンタータ第54番『罪に手むかうべし』の第1曲の転用があるということが分かっています。

本日は、旧バッハ全集の編集の中心となったW. ルストやバッハ研究の第一人者F. スメントによる歌詞の分析研究の成果を踏まえてD. ヘルマンによって部分的に復元された『マルコ受難曲』に基づいてH. グリシュカートが編集した『カンタータ 合唱と合奏のための宗教音楽集』と題された作品を中心に、本日の指揮者である佐々木正利氏が元の歌詞本にあるコラルからいくつかを選択するなどしてカンタータとして全体をまとめたものを演奏します。

第1曲は受難曲の冒頭の合唱（ロ短調、4/4拍子）です。器楽の全奏による伴奏と全体を支配する鞭打ちのリズム（付点のリズム）によって聴き手を受難物語へと導きます。

第2曲のコラル（イ長調、4/4拍子）は、イエスが最後の晩餐の席で弟子のうちの一人が裏切ることを予告したとき、弟子たちが口々に「わたしですか？」とイエスに聞き返したのを聞いた会衆の心情を歌った合唱です。

第3曲アルトのアリア（ニ長調、12/8拍子）は、主の体血とされるパン・ぶどう酒を食すことの喜びを歌います。ヴィオラ・ダ・ガンバによるデュエットおよび通奏低音として奏される2つのリュートが、心の中の喜びを表現します。

第4曲のコラル（ト長調、4/4拍子）は、ゲッセマネの園で悲しみのうちに祈るイエスを優しく見守る会衆の合唱です。続く第5曲のソプラノのアリア（ロ短調、4/4拍子）はゲッセマネの園での祈りを終えたイエスのもとに裏切ったユダが近づいてくることを知った会衆の不安を歌います。

ついに、捕縛の合図である口づけがユダによってイエスにされるに及んで、アルトによる第6曲レチタティーヴォ（ニ長調、4/4拍子）及び第7曲アリア（ダ・カーボ形式、ト長調、4/4拍子）では悲しみと不安、そして裏切りに対する怒りが

歌われます。

その直後、イエスは捕らわれます。罪無きイエスが捕まることによりわたしたちの罪が贖われるのだという祈りが第8曲のコラル（ト長調、4/4拍子）です。

イエスの捕縛によって受難の物語の第1部は幕を閉じます。最後に第9曲のテノールによる伴奏付きレチタティーヴォ（ト長調、4/4拍子）が救い主の死そして自らの死に、恐れずに向き合うべきだと説き、続く第10曲の「受難のコラル」（ロ短調、4/4拍子）では死に向かうイエスに最後まで寄り添うことを会衆が誓います。そして第1部を締めくくるのは第11曲の合唱（ロ短調、2/2拍子）です。イエス・キリストによって永遠の命がもたらされるということを、堂々としたフーガで歌い上げます。

第2部の冒頭では罪無きイエスを奪われた悲しみが、フルートとオーボエ・ダ・モーレのオブリガートを伴った第12曲テノールのアリア（ホ短調、3/4拍子）によって表現されます。

イエスは最高法院での裁判にかけられ、続いてピラトの尋問を受け、死刑の判決が下されます。十字架につけられた上に兵士達から「ユダヤの王様!」と徹底的なからかいと侮辱を受けた場面で歌われるのが第13曲のコラルです。

午前中にイエスのはりつけにされ、十字架上でも罵りを受けます。そして午後3時頃、最後に大声で叫んでイエスは死をむかえました。第14曲のソプラノのアリア（ト長調、6/8拍子）はイエスが人々の罪を贖いながら死んでいくのだ、と歌います。

夕方になり、イエスの亡骸をヨセフは引き取ります。会衆は第15曲のコラル（4/4拍子）を通して、ヨセフと共にイエスの亡骸を見つめながらイエスへの思いを確かにします。

そしてイエスは岩を掘って作った墓に埋葬され、入り口は墓石で塞がれます。第16曲のバスによるレチタティーヴォでは、イエスと父なる神の大きい愛についての思いが語られます。続く第17曲の合唱（ロ短調、12/8拍子）では、その愛ゆえにイエスが引き受けた受難によってわたしたちに救いがもたらされたことを喜び感謝する、と繰り返し表明します。最後に全曲を締めくくるのは第18曲のコラル（ニ長調、4/4拍子）です。イエスによって世が救われわたしたちが真に慰められたのだ、と会衆の感謝を歌います。

（2005 01/09）

歌詞対訳

BWV 106 Gottes Zeit ist die allerbeste Zeit (Actus Tragicus)

1. [Sonatine]

2. [Chor]

Gottes Zeit ist die allerbeste Zeit.
In ihm leben, weben und sind wir,
solange er will.
In ihm sterben wir zu rechter Zeit,
wenn er will.

[Tenors Arioso]

Ach, Herr, lehre uns bedenken,
daß wir sterben müssen,
auf daß wir klug werden.

[Basses Arie]

Bestelle dein Haus;
denn du wirst sterben und nicht lebendig bleiben!

[Chor & Soprans Arioso]

Es ist der alte Bund:
Mensch, du mußt sterben!

Ja, komm, Herr Jesu, komm!

3. [Alts Arie]

In deine Hände befehl ich meinen Geist;
du hast mich erlöst, Herr, du getreuer Gott.

[Basses Arioso & Choral]

Heute wirst du mit mir im Paradies sein.

Mit Fried und Freud ich fahr dahin
In Gottes Willen;
Getrost ist mir mein Herz und Sinn,
Sanft und stille.
Wie Gott mir verheißen hat:
Der Tod ist mein Schlaf worden.

4. [Chor]

Glorie, Lob, Ehr und Herrlichkeit
Sei dir, Gott Vater und Sohn bereit,
Dem heiligen Geist mit Namen!
Die göttlich Kraft
Mach uns sieghaft
Durch Jesum Christum, Amen.

神の時は最良の時 《哀悼式》

1. [ソナティーネ]

2. [合唱]

神の時は最良の時。
わたし達は神のもとで生き、動き、存在します。
神が望む限りにおいて。
わたし達は神のもとで、正しい時に死にます。
神の望む時に。

[テノール・アリオーゾ]

ああ、主よ、わたし達に教えてください、
誰もが死ななければならないという事を。
それによって、わたし達が思慮深くなるように。 (『詩編』第90章第12節)

[バス・アリア]

あなたの家を整えなさい、
あなたは死んで、生き続けないのだから! (『イザヤ書』第38章第1節)

[合唱&ソプラノ・アリオーゾ]

これは古くからの定めです。
「人よ、汝 死すべし!」 (『シラ書』第14章第17節)

そうです、来てください、主 イエスよ、来てください!

3. [アルト・アリア]

あなたの手にわたしは自分の霊を委ねます。
あなたはわたしを救ってくれました、主よ、誠実な神よ。 (『詩編』第31編第6節)

[バス・アリオーゾ&コラール]

今日、あなたはわたしと共に楽園にいる。 (『ルカによる福音書』第23章第43節)

安らぎと喜びと共にわたしは逝きます
神の思うとおりに。
わたしの心と気持ちは慰められ、
穏やかに静まっています。
神がわたしに約束してくれたように、
死はわたしの眠りとなりました。

4. [合唱]

栄光と、賛美と、誉れと、輝きが
あなたにありますように、神なる父と子と
その名と共にある聖霊に!
神の力が
わたし達に勝利をもたらすのです
イエス・キリストを通して。アーメン。

BWV79

Gott, der Herr, ist Sonn und Schild (Kantate zum Reformation)

1. [Chor]

Gott, der Herr, ist Sonn und Schild,
der Herr gibt Gnade und Ehre.
Er wird kein Gutes mangeln lassen den Frommen.

2. [Alts Arie]

Gott ist unsre Sonn und Schild.
Darum rühmet dessen Güte
Unser dankbares Gemüte,
Die er für sein Hauflein hegt.
Denn er will uns ferner schützen,
Ob die Feinde Pfeile schnitzten
Und ein Lasterhund gleich billt.

3. [Choral]

Nun danket alle Gott
Mit Herzen, Mund und Händen,
Der große Dinge tut
An uns und allen Enden,
Der uns von Mutterleib
Und Kindesbeinen an
Unzählig viel zugut
Und noch itzund getan.

4. [Basses Rezitativ]

Gottlob! wir wissen
Den rechten Weg zur Seligkeit;
Denn, Jesu, du hast ihn uns durch dein Wort gewiesen,
Drum bleibt dein Name jederzeit gepriesen.
Weil aber viele noch
Zu dieser Zeit
An fremdem Joch
Aus Blindheit ziehen müssen,
Ach! so erbarme dich
Auch ihrer gnädiglich,
Daß sie den rechten Weg erkennen
Und dich bloß ihren Mittler nennen.

5. [Soprans & Basses Arie (Duett)]

Gott, ach Gott, verlaß die Deinen
Nimmermehr!
Laß dein Wort uns helle scheinen;
Obgleich sehr
Wider uns die Feinde toben,
So soll unser Mund dich loben.

6. [Choral]

Erhalt uns in der Wahrheit,
Gib ewigliche Freiheit,
Zu preisen deinen Namen
Durch Jesum Christum, Amen!

神、主は太陽であり盾

《宗教改革記念日の為のカンタータ》

1. [合唱]

神、主は太陽であり盾、
主は恵みと栄光を与える。
主は敬虔な人々には良いものを欠かす事が無い。(『詩編』第84編第12節)

2. [アルト・アリア]

神はわたし達の太陽であり盾。
ですからその慈しみを称えます
わたし達の感謝の気持ちは
主が自分の群れの為に抱いてくれる慈しみを。
主はわたし達を守り続けてくれるのですから。
たとえ敵が陽の光を削り取り
神を罵る犬が吠えたてても。

3. [コラール]

今こそ皆 神に感謝しなさい、
心、口、そして手でもって。
この方は大きな事をしてくれるのですから
わたし達に、際限無く。
この方はわたし達に、母親の体から
子供の骨に至るまで
数え切れないほど多くの良い事をし、
そしてまた今もしてくれたのです。

4. [バス・レツィタティーフ]

神を賛美せよ!わたし達は知っています、
幸福へと至る正しい道を。
イエスよ、あなたがわたし達を自分の言葉で導いてくれたのですから。
それであなたの名はどんな時も賛美を受け続けるのです。
しかし多くの人がいまだ
今日この時にも、
自分に縁の無いくびきを付けて
盲目のまま進まなければならないのですから、
ああ!どうか憐れんでください、
この人々にも恵み深く。
彼らが正しい道を知り
あなたをただ自分達の仲介者と呼ぶ事ができるように。

5. [ソプラノ&バス二重唱]

神よ、ああ神よ、あなたの者達を
もう決して見捨てないでください!
あなたの言葉をわたし達に明るく輝かせてください。
たとえ
わたし達に対して敵が荒れ狂っても、
それでわたし達の口はあなたを賛美する事になるでしょう。

6. [コラール]

真理の中でわたし達を護り、
永遠の自由を与えてください、
あなたの名を称える為に
イエス・キリストを通して。アーメン!

BWV 105

Herr, gehe nicht ins Gericht mit deinem Knecht
〈Kantate zum 9. Sonntag nach Trinitatis〉

1. [Chor]

Herr, gehe nicht ins Gericht mit deinem Knecht.
Denn vor dir wird kein Lebendiger gerecht.

2. [Alts Rezitativ]

Mein Gott, verwirf mich nicht,
Indem ich mich in Demut vor dir beuge,
Von deinem Angesicht.
Ich weiß, wie groß dein Zorn und mein Verbrechen ist,
Daß du zugleich ein schneller Zeuge
Und ein gerechter Richter bist.
Ich lege dir ein frei Bekenntnis dar
Und stürze mich nicht in Gefahr,
Die Fehler meiner Seelen
Zu leugnen, zu verhehlen!

3. [Soprans Arie]

Wie zittern und wanken
Der Sünder Gedanken,
Indem sie sich untereinander verklagen
Und wiederum sich zu entschuldigen wagen.
So wird ein geängstigt Gewissen
Durch eigene Folter zerrissen.

4. [Basses Rezitativ]

Wohl aber dem, der seinen Bürgen weiß,
Der alle Schuld ersetzt,
So wird die Handschrift ausgetan,
Wenn Jesus sie mit Blute netzet.
Er heftet sie ans Kreuze selber an,
Er wird von deinen Gütern, Leib und Leben,
Wenn deine Sterbestunde schlägt,
Dem Vater selbst die Rechnung übergeben.
So mag man deinen Leib, den man zu Grabe trägt,
Mit Sand und Staub beschütten,
Dein Heiland öffnet dir die ewigen Hütten.

5. [Tenors Arie]

Kann ich nur Jesum mir zum Freunde machen,
So gilt der Mammon nichts bei mir.
Ich finde kein Vergnügen hier
Bei dieser eitlen Welt und ird'chen Sachen.

6. [Choral]

Nun, ich weiß, du wirst mir stillen
Mein Gewissen, das mich plagt.
Es wird deine Treu erfüllen,
Was du selber hast gesagt:
Daß auf dieser weiten Erden
Keiner soll verloren werden,
Sondern ewig leben soll,
Wenn er nur ist Glaubens voll.

主よ、あなたの僕を裁きにかけてください 《三位一体節後第9日曜日の為のカンタータ》

1. [合唱]

主よ、あなたの僕を裁きにかけてください。
あなたの前で正しいと認められる命ある者などいないのですから。
〈『詩編』第143編第2節〉

2. [アルト・レツィタティーフ]

わたしの神よ、わたしを退けないでください、
謙虚にあなたの前で身をかがめるわたしを、
あなたの前から。
分かっています、あなたの怒りとわたしの罪がどれほど大きいから、
そしてあなたが迅速な証人であると同時に
正しき裁き主でもあるのを。
わたしはあなたに進んで告白を行い
危険に身を投じません、
自分の魂の誤りを
否定し、隠そうとする危険に!

3. [ソプラノ・アリア]

どれほどおののき、よろめいている事でしょう
罪人達の思いは。
一方ではお互いを訴え合うのに
他方ではお互いを弁護しさえします。
それで怖れおののく良心は
各々の拷問によって引き裂かれるのです。

4. [バス・レツィタティーフ]

だが幸いだ、自分の証人を知っている者は。
この方はすべての罪を償い、
証文を破棄してくれるだろう、
イエスがそれを血で塗り消すのだ。
彼は血を自ら十字架に付け、
あなたの財産、体、そして命について、
あなたの死の時が打たれる時には、
父に自らそれらの決済を渡す。
そうしてあなたの体は、墓へと運ばれ、
砂と塵で覆われて、
あなたの救い主があなたに永遠の小屋を開けてくれるのだ。

5. [テノール・アリア]

イエスさえ自分の友にできるなら、
マモンもわたしには何の価値も無い。
わたしはどんな楽しみも見つけない、
この虚しい世とかりそめの財産には。

6. [コラール]

今や、わたしは分かっています、あなたは静めてくれます
わたしを悩ますこの良心を。
あなたの誠実さが果たすでしょう、
あなたが自ら語った事を。
この広い大地で
誰一人として失われる事無く、
永遠の命を得ると、
ただ信仰に満ちた人であるなら。

BWV 247

Geh, Jesu, geh zu deiner Pein!

〈Passionsmusik nach Evangelisten Marco〉

イエスよ、あなた自身の苦痛へと向かってください!

《マルコ福音書による受難音楽》

Erster Teil

第一部

1. [Chor]

Geh, Jesu, geh zu deiner Pein!
Ich will so lange dich beweinen,
Bis mir dein Trost wird wieder scheinen,
Da ich versöhnet werde sein.

1. [合唱]

向かってください、イエスよ、あなた自身の苦痛へと!
わたしはあなたを悼んで泣き続けます、
わたしにあなたの慰めが再び現れる日まで。
その時、わたしは静められるでしょう。

〔イエスを殺す計画〕

過越祭と除酵祭の2日前になると、イエスを捕らえ、殺そうとしていた祭司長や律法学者達は「民衆の間で騒ぎになるといけないから、祭りの間はやめよう」と言い合った。

〔香油を注がれる〕

さてイエスがベタニアにいた時、らい病人シモンの家で食事していると、混ぜ物の無い高価な香油の入った瓶を持った一人の女性が入ってきて、その瓶を割って香油をイエスの頭に注いだ。そこにいた何人かが、腹を立てて「一体何でそんな無駄遣いをするんだ? この香油を300グロッシェンで売ったら貧しい人に施しができたのに」と彼女に文句を言った。だがイエスは言った。「落ち着きなさい。何故この女性を困らせるのだ? 彼女はわたしの為にしてくれたのだ。おまえ達の周りにはいつも貧しい人々がいて、おまえ達は望む時に彼らの為にしてあげる事ができる。だがわたしはいつもいる訳ではない! 彼女はできる限りの事をしてくれた。わたしの体に香油を注ぎ、埋葬する為の準備を前もってしてくれたのだ。よく、おまえ達に言うておく、全世界のこの福音が告げられる所では、彼女が今してくれた事も記念として語られるだろう」

〔ユダ、裏切りを企てる〕

十二人の一人、イスカリオテのユダはイエスを裏切ろうと祭司長達の所へ行った。彼らはそれを聞いて喜び、ユダに金を与える約束をした。それで彼はイエスを裏切る機会を窺っていた。

〔過越の食事〕

さて除酵祭の第一日目、過越しの子羊を捧げる日、イエスの弟子達は「どこへ行って過ぎ越しの食事をする用意をしましょうか?」とイエスに言った。イエスは二人の弟子を使いに出して言った。「街へ行くと水がめを運んでいる男に会うだろうから、ついて行き、その男が入った家の主人に「先生が「弟子達と過越しの食事をする客間はどこか?」とあなたに言っています」と言いなさい。そうしたら主人はおまえ達に、わたし達の為に整えられた大きな広間を見せてくれるだろう」そして弟子達が街へ行くと言われたとおりになったので、過越しの食事の用意をした。

さて、夕方にはイエスは十二人と一緒にやって来た。彼らが食卓につき、食事しているとイエスが言った。「よく、おまえ達に言うておく、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている」すると彼らは悲しみ、代わり代わりに「わたしですか?」とイエスに言った。

2. [Choral]

Ich, ich und meine Sünden,
Die sich wie Körnlein finden
Des Sandes an dem Meer,
Die haben dir erregt
Das Elend, das dich schläget,
Und das betrübt Marterheer.

イエスは彼らに答えて言った。

「十二人のうちの一人、わたしと同じ鉢に手を浸している者がそうだ。

確かに人の子が去るのは聖書に書かれているとおりの事だ。

だが人の子を裏切ろうとしているのは不幸な者だ。その者は生まれてこない方が良かっただろう」

〔主の晩餐〕

彼らが食事をしている時、イエスはパンを取り、感謝の祈りをしてそれをちぎると、弟子達に与えて言った。

「取って食べなさい、これはわたしの体だ」

また杯を取り、感謝の祈りをして弟子達に与えると、彼らは皆、それを飲んだ。

イエスは彼らに言った。

「これは多くの人の為に流される、新しい契約の為にわたしの血だ。

よく、おまえ達に言うておく、

わたしは最早ぶどうの実から造られたものを、神の国で新たに飲む日まで飲む事は無い」

3. [Alts Arie]

Mein Heiland, dich vergeß ich nicht!
Ich habe dich in mich verschlossen
Und deinen Leib und Blut genossen
Und meinen Trost auf dich gericht.

2. [コラール]

わたしです、わたしとわたしの多くの罪、
それが海辺の砂粒のように
尽きる事無くあり、
それがあなたの身に引き起こしたのです、
あなたを打つ苦悩と、
悲しい多くの責め苦を。

3. [アルト・アリア]

わたしの救い主よ、あなたの事をわたしは忘れません!
わたしはあなたを自分の中にしまい込み
あなたの体と血を受け
自分の慰めをあなたに求めたのです。

そして彼らは賛美の祈りを捧げ、オリーブ山へ向かった。

〔離反の予告〕

イエスは弟子たちに言った。

「おまえ達は今夜わたしのもとを離れていくだろう。

それはこう書かれているからだ。

「わたしは羊飼いを打つ、すると羊の群れは散らされるだろう」

だがわたしが復活した後には、わたしはおまえ達より先にガリレアへ行くつもりだ」

だがペテロは「たとえ皆があなたから離れていっても、わたしはあなたのもとを決して離れません」とイエスに言った。

イエスはペテロに言った。

「よく、おまえに言うておく、

鶏が二度鳴く前に、おまえは三度わたしとの事を否定するだろう」

だがペテロはさらに「いえ、たとえあなたと共に死ぬ事になろうとも、わたしはあなたとの事を否定しません」と言い、
同じ事をすべての弟子達も言った。

〔ゲッセマネでの祈り〕

そして彼らはゲッセマネという名の園にやって来た。

そこでイエスは弟子達に言った。

「わたしが行って祈っている間、ここに座っていないさい」

そしてペテロ、ヤコブ、ヨハネを連れて行くと、そこでイエスは震え、怯え始め、言った。

「わたしの魂は悲しみで死にそうだ。ここにいて目を覚ましていなさい」

4. [Choral]

Betrübtes Herz, sei wohlgemut,
Tu nicht so gar verzagen.
Es wird noch alles werden gut,
All dein Kreuz, Not und Klagen
Wird sich in lauter Fröhlichkeit
Verwandeln in gar kurzer Zeit,
Das wirst du wohl erfahren.

4. [コラル]

悲しむ心よ、元気を出してください、
そんなに怯える事はありません。
すべてが良くなっていくのです、
あなたの十字架も、苦しみも嘆きもすべて
大きな喜びへと
ごく僅かの間に変わっていき、
それをあなたは十分に味わうでしょう。

そして少し進むと、地に伏し、できるならこの時が過ぎ去っていく事を願い、言った。
「アッパ、わたしの父よ、あなたにはすべてが可能です。この杯をわたしから取り上げてください。
ですがわたしの望むようにではなく、あなたの思うとおりに」

戻ると三人が眠っているのを見て、イエスはペテロに言った。
「シモンよ、眠っているのか?一時さえ目を覚ましてられないのか?
誘惑に負けないように、起きて祈っていなさい、霊はそのつもりでも、肉は弱いものなのだ」
そして再び進んで行き、同じ言葉を語った。
そして再び戻ると、彼らはまた眠っていた。彼らは眠かったのでイエスに何と答えて良いか分からなかった。

イエスは三度進んで行き、戻って来ると彼らに言った。
「ああ、まだ眠り休もうというのか?
もう十分だ、時が来た。
見よ、人の子は罪人の手に引き渡される。
起きよ、行こう。
見よ、わたしを裏切るものが近くにいる」

5. [Soprans Arie]

Er kommt, er kommt, er ist vorhanden!
Mein Jesu, ach! Er sucht dich,
Entfliehe doch, und lasse mich
Mein Heil, statt Deiner in den Banden.

5. [ソプラノ・アリア]

彼が来ます、彼が現れます!
わたしのイエスよ、ああ!彼はあなたを探しているのです、
どうか逃れて、わたしを縛ってください、
わたしの救い主よ、あなたの代わりに。

[イエスの捕縛]

そしてすぐ、イエスがまだ話している内に十二人の一人ユダが、
祭司長や律法学者、長老達から送られた、剣と棒を持った大勢の人々と共にやって来た。
この裏切り者は彼らに合図として
「わたしが口づけするのがその人です。確実に捕まえて、連れて行ってください」と言っていた。
そしてユダはやって来ると、すぐイエスに近づき、「ラビ」と言って彼に口づけした。

6. [Alts Rezitativ]

Der Glocken bebendes Getön
Soll unsrer trüben Seelen Schrecken
Durch ihr geschwungnes Erze wecken
Und uns durch Mark und Adern gehn.
O, möchte doch dies bange Klingen,
Das über Gräber täglich gellt,
Allmacht'ger Schöpfer dieser Welt
Dir Zeugnis unsres Jammers bringen.

6. [アルト・レツィタティーフ]

いくつもの鐘の震えた音が
わたし達の悲しむ魂を怯えさせます、
その銅を打ち鳴らして。
そしてその音はわたし達の骨と脈まで響いてきます。
ああ、どうかこの不安な響きが、
墓の上に日々響いているこの音が、
この世の全能の創造主である
あなたに、わたし達の悲嘆の証として届いてくれたら。

7. [Alts Arie]

Falsche Welt, dein schmeichelnd Küssen,
Ist der frommen Seelen Gift.

Deine Zungen sind voll Stechen,
Und die Worte, die sie sprechen,
Sind zu Fallen angestift.

7. [アルト・アリア]

不正な世よ、おまえの媚びへつらう口づけは
敬虔な魂には毒となります。

おまえの舌は棘に満ちていて、
そこから語られる言葉は
墮落へと唆すのです。

人々はイエスに手をかけて捕まえた。

するとそこにいた一人が剣を抜き、大祭司の従者に切りかかってその耳を切り落とした。

イエスは応えて彼らに言った。

「あなた達はまるで人殺しに相対するように、剣や棒でわたしを捕まえようとしている。

わたしはいつも神殿の中で、あなた達の側に座って教えていたのに、あなた達はわたしを捕まえなかったではないか。

だがこれは聖書が実現する為なのだ」

8. [Choral]

Jesu, ohne Missetat,
Im Garten Vorhanden,
Da man dich gebunden hat
Fest mit harten Banden.
Wenn uns will der böse Feind
Mit der Sünde binden,
So laß uns, o Menschenfreund,
Dadurch Lösung finden.

8. [コラール]

イエスよ、あなたは何の悪事も働いていないのに、
園にいた時、
そこで縛られてしまいました。
きつく、強い縄によって。
わたしたちを邪まな敵が
罪によって縛ろうとしたら、
どうかわたし達が、ああ 人間の友よ、
それによって救済を得られるようにしてください。

そして弟子達はイエスを見捨て、逃げ出した。

一人の若者が素肌に亜麻布をまとい、イエスの後を付いて来っていた。

人々はその若者を捕らえたが、彼は亜麻布を捨てて裸で逃げ出した。

9. [Tenors Rezitativ]

Im Leben fromm, getreu im Sterben
Soll fest der Christ zu Christo stehn;
Dann wird dem Tod in's Aug' er sehn,
Die Furcht kann ihn nicht mehr entfärben.
Ja selig, der in Christi Geist
Sich über die Natur erhebet,
Vor Gruft und Särgen nicht erbebet,
Wenn ihn sein Schöpfer scheiden heißt.

9. [テノール・レツィタティーフ]

生において敬虔に、死において誠実に
キリスト者はしっかりとキリストへ向かうべきだ。
それで、死を前にしてキリスト者はその目で見えよう、
怖れも最早自分を色褪せさせはしないという事を。
そう 幸いだ、キリストの霊のもとで
自分の本能を克服し、
墓と棺を前にしても震えない人は。
その人に創造主がこの世への別れを命じる時にも。

10. [Choral]

Ich will hier bei dir stehen,
Verachte mich doch nicht,
Von dir will ich nicht gehen,
Wenn dir dein Herze bricht,
Wenn dein Haupt wird erblassen
Im letzten Todesstoß,
Alsdenn will ich dich fassen
In meinen Arm und Schoß.

10. [コラール]

わたしはここであなたの側にいます、
どうかわたしを侮らないでください。
あなたのもとをわたしは離れません、
あなたの心が張り裂けようとする時も。
あなたの顔が最期の死の衝撃で
青ざめる時、
その時にはわたしはあなたを
この腕とひざに抱きましょう。

11. [Chor]

Von dir, du Vorbild aller Frommen,
Von dir, erhab'ner Gotteshon,
Von dir, o Lamm im Himmelsthron,
Ist ew'ges Leben wieder kommen.

11. [合唱]

あなたから、あらゆる敬虔な人の手本よ、
あなたから、気高き神の子よ、
あなたから、おお 天の王座にいる子羊よ、
永遠の命はまたやって来るのです。

Zweiter Teil

12. [Tenors Arie]

Mein Tröster ist nicht mehr bei mir,
Mein Jesu, soll ich dich verlieren,
Und zum Verderben sehen führen?
Das kömmt der Seele schmerzlich für.
Der Unschuld, welche nichts verbrauchen,
Dem Lamm, das ohne Missetat
Wird in dem ungerechten Rat
Ein Todesurteil zugesprochen.

第二部

12. [テノール・アリア]

わたしを慰めてくれる方はもうわたしの側にはいません。
わたしのイエスよ、わたしはあなたを失い、
あなたが滅びへと進むのを見るのでしょうか？
これは魂にとって苦痛です。
何一つ悪事を働いていない罪無き方に、
罪業無き子羊に、
不正な手段によって
死の判決が下されたのです。

〔最高法院での裁判〕

そして人々はイエスを祭司長や長老、律法学者達のところへ連れて行った。
ペテロは離れてイエスの後を付いて行き、大祭司の屋敷の中に入ると従者達の側に座って火にあたっていた。

さて祭司長達と最高法院の全員はイエスに対する証言を求めたが、何も得られなかった。

イエスに対する不正な証言が多く出たが、それが食い違っていたからである。

そこで数人が立ち上がり、イエスに対する不正な証言を語った。

「わたし達は彼がこう言うのを聞きました。

『わたしは手で作られたこの神殿を打ち壊し、三日で手で作られていない別の神殿を築く』」

だが彼らの証言もまた食い違った。

そこで大祭司が彼らの中で立ち上がり、「おまえに対するこれらの証言に何も答えないのか?」とイエスに尋ねた。

だが彼はじっと黙り、何も答えなかった。

それで大祭司は再び彼に「おまえは賛美される方の子、キリストなのか?」と尋ねた。

イエスは言った。

「わたしがそうだ。

おまえ達は人の子が力ある方の右に座り、天の雲に乗ってやって来るのを見るだろう」

すると大祭司は自分の衣を引きちぎった。

「まだ証人が必要だろうか? 神への冒瀆を耳にしたのだ。どうするべきか?」

彼らは皆、イエスを死罪にすべきだと激しく責めた。

そして何人かがイエスに唾を吐きかけ、目隠しをした上でこぶしで殴りながら「誰が殴ったか当ててみる!」と言い始めた。

そして従者達が彼の顔を殴った。

〔ペテロの否認〕

さてペテロが屋敷の中に座っていると、大祭司の下女が一人やって来た。

彼女は火にあたっているペテロを見ると彼をじっと見つめて「あなたもナザレのイエスと一緒にいたね」と言った。

だが彼は否定して言った。

「わたしはその人を知らないし、あなたの言っている事も分からない」

そして彼が前庭に出て行くと、鶏の鳴き声がした。

下女は彼を見て、側にいた人々に「この人はあの男の一味だ」とまた言い始めた。

そしてペテロは再び否定した。

そしてしばらくしてから、側にいた人々がペテロに言った。

「確かにおまえもあの男の一味だ。おまえの詛言がガリラアの者だと示している」

だが彼はいまわしく思い、誓って言った。

「わたしはあなた達が言っている人を知らないんです」

すると再び鶏の鳴き声がした。

その時になってペテロはイエスの言葉を思い出した。

『鶏が二度鳴く前に、おまえは三度わたしとの事を否定するだろう』

そして彼は泣きだした。

〔ピラトの訊問〕

朝になるとすぐ、祭司長達は長老や律法学者、つまり最高法院全員で話し合い、イエスを縛り、引き連れて行ってピラトに引き渡した。

ピラトがイエスに「おまえはユダヤの王なのか?」と尋ねると、イエスは答えた。

「あなたの言うとおりだ」

そして祭司長達が厳しく彼の罪を述べていった。

だがピラトは再びイエスに「何も答えないのか? 見ろ、あんなに激しくおまえを訴えているのに!」と尋ねた。

だがイエスはそれ以上何も答えず、ピラトは不思議に思った。

〔死刑の判決〕

さてピラトは逾越しの祭の時に、囚人の中から人々の望む者を一人解放するようにしていた。

またこの当時、暴動の時に人殺しをした暴徒達と一緒にバラバという男が捕らえられていた。

そして民衆がやって来て、いつものように釈放を願い出ると

ピラトは彼らに「望むのなら、あのユダヤの王を釈放するが?」と言った。

ピラトは祭司長達がイエスを妬んで引き渡した事を分かっていたのである。

だが祭司長達はバラバの方を釈放してもらうように民衆を煽っていた。

そこでピラトは再び答えて「ではおまえ達が訴えているユダヤの王だという男は、一体どうして欲しいのだ?」と言った。

人々はまた「十字架につけろ!」と叫んだ。

そこでピラトは「彼は一体どんな悪事を働いたのだ?」と彼らに言った。

だが彼らは「十字架につけろ!」とさらに叫んだ。

それでピラトは民衆の満足するようにとバラバを解き放ち、イエスを鞭打たせ、十字架につけるように引き渡した。

〔兵士達の侮辱〕

さて兵士達はイエスを総督の屋敷の中に連れて行き、全部隊を召集した。

そしてイエスに紫の衣を着せ、茨の冠を編んで彼に被せて、「ユダヤの王様、万歳!」と敬礼し始めた。

そして彼の頭を草で叩き、唾を吐きかけ、跪いて拝んだ。

13. [Choral]

Man hat dich sehr hart verhöhnet
Dich mit großem Schimpf belegt
Und mit Dornen gar gekrönt:
Was hat dich dazu bewegt?
Daß du möchtest mich ergötzen,
Mir die Ehrenkron aufsetzen.
Tausend, tausendmal sei dir,
Liebster Jesu, Dank dafür.

13. [コラール]

あなたはたいへんひどく嘲られ
大きな恥辱を浴びせられて、
茨の冠まで被せられました。
何があなたにそこまでさせたのでしょうか?
あなたはわたしを喜ばせ、
わたしに栄光の冠を被せようとしているのです。
千回も、何千回もあなたにありますように、
最愛のイエスよ、それに対する感謝が。

そして彼らはイエスを嘲ると、彼の紫の衣を脱がせ、元の服を着せて十字架につける為に外に連れ出した。

〔はりつけ〕

そして田舎から出てきたクレネ人のシモンという男（アレクサンドロスとルフォスの父）が通りかかったので、彼に無理やり十字架を担がせた。
彼らはイエスを「されこうべの場所」という意味の、ゴルゴタという所へ連れて行った。
そこで没薬をワインに入れてイエスに飲ませようとしたが、イエスは飲まなかった。
そして兵士達は彼を十字架につけ、その衣を分け、それを誰の物にするか、くじ引きにした。
彼らがイエスを十字架につけたのは、午前9時だった。
そしてイエスの頭上には「ユダヤの王」と罪状書きが書かれた。
また左右に一人ずつ、二人の人殺しを一緒に十字架につけた。
こうして「彼は罪人として裁かれる」という聖書の言葉が成就した。

通りかかった人々は頭を振り、イエスを罵って言った。
「へっ、神殿を打ち壊して三日で建て直す奴よ！十字架から降りて自分自身を救ってみろ」
同じように祭司長達も律法学者達と一緒に嘲って言った。
「他人は救っても、自分自身は救えない。
イスラエルの王、キリストなら、十字架から降りてみる、それを見たら我々も信じよう」
そして一緒に十字架につけられた者達も、イエスを罵った。

〔イエスの死〕

さて昼の十二時になると暗闇が地を覆いつくし、それが三時まで続いた。
そして三時頃、イエスは大声で叫んで言った。
「エリ、エリ、ラマ、アザブタニ？」
これは「わたしの神よ、わたしの神よ、何故わたしを見捨てたのですか？」という意味である。
側にいてこれを聞いていた数人は「見ろ、エリアを呼んでいるぞ」と言った。
ある者が走り、海綿を酸っぱいぶどう酒に浸して
葦の棒につけて彼に飲ませながら、「待て、エリアが彼を助けに来るか見てみよう」と言った。

だがイエスは大声で叫ぶと、息を引き取った。

14. [Soprans Arie]

Welt und Himmel, nehmt zu Ohren

Jesus schreiet überlaut.

Allen Sündern sagt er an,
Daß er nun genug getan,
Daß das Eden aufgebaut,
Welches wir zuvor verloren.

14. [ソプラノ・アリア]

世と天よ、耳を傾けなさい

イエスが大きな声で叫んでいます。

あらゆる罪人に対し彼は叫んでいるのです、
自分が今や十分に成し遂げ、
それによってエデンが築かれたのだと。
わたし達がかつて失ってしまったエデンが。

すると神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。

さて、そこでイエスに向かって立っていた百人隊長は、イエスがこうして叫びながら息を引き取ったのを見て、言った。
「本当にこの人は神の子だったんだ」

また遠くから見守っていた女性達の中にはマグダラのマリア、小さなヤコブとヨセフの母マリア、そしてサロメがいた。
彼女たちはガリラヤにいた時にイエスに従って付いて来たのである。
他にもイエスに付いてエルサレムへ上ってきた女性達が数多くいた。

〔埋葬〕

夕方になると、その日はサバトの前の準備の日であったので、
アリマテアのヨセフという、身分の高い議員で、神の国を待ち望んでいた男が来て、
勇気を出してピラトの下へ行き、イエスの死体を渡してくれるように頼んだ。
ピラトはイエスがもう死んでしまったのかと不思議に思い、百人隊長を呼び、イエスがすでに死んだのかどうか尋ねた。
そして百人隊長から告げられると、ピラトはヨセフに亡骸を渡した。

15. [Choral]

O! Jesu du,
Mein Hilf und Ruh!
Ich bitte dich mit Tränen,
Hilf, daß ich mich bis ins Grab
Nach dir möge sehnen.

15. [コラール]

ああ! イエスよ、
わたしの助け、安らぎよ!
わたしは涙を流しながら願います、
力を貸してください、わたしが墓に入るまで
あなたを慕い続けられるように。

そしてヨセフは亜麻布を買い、イエスを十字架から降ろすと、それで包み、
岩を掘って作った墓の中に納めると、墓の入り口に石を転がしておいた。
マグダラのマリアとヨセフの母マリアはイエスが葬られた場所を見つめていた。

16. [Basses Rezitativ]

O große Lieb! Es hält uns wert
Der König Himmels und der Erde;
Er will, daß uns das Heil auch werde,
Das unsre Toten schon verkürt.
Dort stehn sie vor des Lammes Throne
Entrückt der Erde Eitelkeit;
Im perlenreines Unschuldskleid
Empfingen sie des Lebens Krone.

So weit der Himmel spannt sein Zelt,
Das Meer das Erdenrund umfließet,
So weit die Sonn' ihr Licht ergießet,
Preist selig sie die ganze Welt.

Doch wir, wir gehn im Pilgerkleide
Noch eine Zeit nach Gottes Wahl
Und wandeln hier im dunkeln Tal:
Dann kommt des Wiedersehens Freude.

16. [バス・レツィタティーフ]

おお 大きな愛! わたし達を大切に守ってくれているのだ、
天と地の王が。
キリストは、救いがわたし達のものとなるように望み、
その救いはわたし達の死者をすでに輝かせている。
天で死者達は子羊の王座の前に立ち
地上の空しさから引き離される。
真珠の縫い付けられた汚れ無き衣をまとい、
彼らは命の冠を授かるのだ。

大地がその天幕を張り広げる限り、
海は大地の周りを流れ続ける。
太陽がその光を注ぐ限り、
全世界は太陽を幸福であると称え続ける。

だがわたし達は、巡礼の装いで
さらに一時、神に選ばれる事を目指して進み、
この暗い谷をさまよう。
そして再会の喜びがやって来るのだ。

17. [Chor]

Bei deinem Grab und Leichenstein,
Will ich mich stets, mein Jesu, weiden
Und über Dein verdienstlich Leiden,
Von Herzen froh und dankbar sein.

Schau, diese Grabschrift sollst du haben;
Mein Leben kömmt aus deinem Tod,
Hier hab ich meine Sündennot
Und Jesum selbst in mich begraben.

17. [合唱]

あなたの墓と墓石の側で、
わたしはいつも、わたしのイエスよ、養われるでしょう。
そしてあなたの賞賛すべき受難について
心から喜び、感謝します。

見てください、この墓碑銘があなたのものとなるでしょう。
『わたしの命はあなたの死によってもたらされます、
ここに、わたしは自分の罪の苦しみと
イエスを自らの中に葬りました』

18. [Choral]

Auf, mein Herz! des Herren Tag
Hat die Nacht der Furcht vertrieben;
Christus, der begraben lag,
Ist im Tode nicht geblieben.
Nunmehr bin ich recht getröst't:
Jesus hat die Welt erlöst.

18. [コラール]

起きなさい、わたしの心よ!主の日が
怖れの夜を追い払ってくれました。
キリストは、墓に葬られましたが、
死に留まってはいませんでした。
今や、わたしは本当に慰められました。
イエスが世を救ったのですから。

(対訳:若林 敦盛)



盛岡バッハ・カンタータ・フェラインの歴史

1977年に結成以来「J.S. バッハの教会カンタータの研究と演奏を通して音楽芸術を追求する」ことを目的として、25年間活動を続けてきました。主な演奏会の経過は以下のとおりです。

1977年	2月27日	「カンタータを歌う会」として発足		
	6月28日	「盛岡バッハ・カンタータ・フェライン」に改称		
1978年	2月26日	「バッハコンツェルト」	カンタータ45番、147番	指揮：小林道夫 (芸大と共演)
1979年	10月10日	「BACH ABEND」	カンタータ 158番、131番	指揮：小林道夫
1980年	2月27日	「バッハのタベ」	カンタータ80番	指揮：小林道夫 (芸大と共演)
	12月22日	この年より「チャリティー・コンサート」を、盛岡市内のバロック音楽愛好家グループと共催(～1997年)		
1981年	7月4日	「BACH ABEND」	カンタータ 195番、182番	指揮：小林道夫
1982年	11月22日	「バッハのタベ」	カンタータ 158番、4番	指揮：佐々木正利
1985年	3月16日 17日	J.S. バッハ生誕 300年記念演奏会 「ヨハネ受難曲」	ヨハネ受難曲	指揮：佐々木正利 (仙台宗教音楽合唱団と合同演奏)
	11月3日	仙台北教会宗教音楽のタベ「メサイア」	メサイア(G.F.ヘンデル)	指揮：佐々木正利
	11月29日	G.F.ヘンデル生誕 300年記念演奏会「メサイア」	メサイア(G.F.ヘンデル)	指揮：佐々木正利
1986年	4月11日	「宗教音楽のタベ」	ドイツ・レクイエム (H.シュッツ)ほか	指揮：佐々木正利
	4月～ 5月	第1回ドイツ演奏旅行	ドイツ・レクイエム (H.シュッツ)ほか	指揮：佐々木正利
	7月11日	「東京プリステン演奏会」共演	スターバト・マーテル (ヘルゴレージ)	指揮：赤松 安
1987年	3月28日	創立10周年記念演奏会「カンタータのタベ」	カンタータ34番、70番、102番ほか	指揮：佐々木正利
	11月27日	ムシカ・デラルテ・トウキョウ演奏会 「バロック音楽のタベ」(主催)		
1988年	3月12日 13日	仙台宗教音楽合唱団との合同演奏会 「ミサ曲口短調」	ミサ曲口短調	指揮：佐々木正利
	9月17日	「今仲幸雄バリトニリサイタル」(主催)		
	11月17日	「ミヒャエル・ショッパーパーバリトニリサイタル」(主催)		
1989年	4月24日	「二重合唱のタベ」	モテット2番、5番(J.S.バッハ)ほか	指揮：佐々木正利
1990年	3月10日 11日	盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、 仙台宗教音楽合唱団合同演奏会	クリスマス・オラトリオ4～6部、 ミサ曲へ長調(J.S.バッハ)	指揮：佐々木正利
	10月1日	「アグネス・ギーベル 佐々木正利 ジョイントリサイタル」(主催)		
	12月～ 翌1月	第2回ドイツ演奏旅行	クリスマス・オラトリオほか	指揮：C.ポッペン 佐々木正利
1991年	3月10日	ドイツ演奏旅行帰国演奏会	モテット1、2番(J.S.バッハ)他、 ブクステフーデ、シュッツ	指揮：佐々木正利
	10月14日 18日	「カンタータ第140番、コーヒーカンタータ」	カンタータ140番、 コーヒーカンタータ	指揮：H.ヴィンシャーマン (ドイツ・バッハゾ リステンと共演)
1992年	3月21日	「バッハとメンデルスゾーンのカンタータのタベ」	カンタータ93番ほか	指揮：佐々木正利
1993年	10月20日 24日 29日	「マタイ受難曲」(盛岡、仙台、岡山、東京)	マタイ受難曲(J.S.バッハ)	指揮：H.ヴィンシャーマン (ドイツ・バッハゾ リステンと共演)
1994年	7月25日	「カンタータ147番」 仙台バッハアカデミーにおいて	カンタータ147番	指揮：佐々木正利(仙台 フィル・バッハアン サンブルと共演)
	12月18日	弘前市民クリスマス： G.F.ヘンデル「メサイア」演奏会に出演	メサイア (G.F.ヘンデル)	指揮：佐々木正利
1995年	4月末～ 5月	第3回ドイツ演奏旅行	天地創造 (J.ハイドン)ほか	指揮：ヨセフ・ツィルヒ 佐々木正利

1995年	8月26日	一関・東日本合唱祭参加	モテット6番ほか	指揮:佐々木正利
	9月26日	剣持清之・トリオフィオーレ「モーツァルト室内楽のタベ」(主催)		
	10月8日	青山町教会チャペルコンサート	天地創造抜粋(J.ハイドン)ほか	指揮:小原一穂
	11月22日	「天地創造」(盛岡、仙台)オーケストラ・アンサンブル金沢と共演	天地創造(J.ハイドン)	指揮:岩城宏之
1996年	3月15日	「バッハのタベ」演奏会	カンタータ21,131番、モテット4番	指揮:佐々木正利
1997年	4月13日	20周年記念演奏会	「昇天祭オラトリオ」 「マニフィカト」ほか(J.S.バッハ)	指揮:H.J.ロッチュ 佐々木正利
1998年	11月20日	「ヴィンシャーマンの口短調ミサ」演奏会 盛岡コーロ・デラ・パーチェと共演	ミサ曲口短調(J.S.バッハ)	指揮:H.ヴィンシャーマン (ドイツ・バッハゾ リステンと共演)
	12月12日	「盛岡いのちの電話」 チャリティーコンサート	カンタータ151番,191番 讃美歌数曲	指揮:佐々木正利
1999年	4月20日	シュッツのダビデ詩篇と バッハ、メンデルスゾーンのモテットのタベ	ダビデ詩篇曲3曲 モテット3番(J.S.バッハ) モテット3曲メンデルスゾー	指揮:佐々木正利
	11月11日 12日	第4回ドイツ演奏旅行 ケンペン・プロブスタイ教会 ボン・ベートーヴェンホール	ミサ曲口短調(J.S.バッハ)	指揮:H.ヴィンシャーマン (ドイツ・バッハゾ リステンと共演)
	11月14日	インゲルハイム・ザール教会	ダビデ詩篇曲3曲 モテット3番(J.S.バッハ) モテット3曲メンデルスゾーン	指揮:佐々木正利
	12月22日	「盛岡いのちの電話」 チャリティーコンサート	モテット、三つの宗教的な歌ほか (メンデルスゾーン) オルゲルビューヒライン (J.S.バッハ)	指揮:佐々木正利
2000年	11月23日	クリスマス・オラトリオ全曲演奏会	クリスマス・オラトリオ(J.S.バッハ)	指揮:H.ヴィンシャーマン (ドイツ・バッハゾ リステンと共演)
2001年	3月13日	「盛岡いのちの電話」開局10周年記念 チャリティーコンサート	十字架上のイエス・キリストの七つ の言葉(シュッツ)ほか	指揮:佐々木正利
	8月11日 12日	岡山バッハカンタータ協会主催ドイツ演奏旅行に 有志(24人)同行参加 ライプツィヒ・聖トーマス教会聖歌隊席 クヴェトリンブルグ・シュティフツ教会	カンタータ39番,102番,158番, モテット6番(J.S.バッハ)	指揮:D.ティム (ライプツィヒ・ バロックオーケス トラと共演)
	10月16日	クルト・マズア指揮ロンドンフィル ベートーヴェン「第九交響曲」演奏会	交響曲第9番「合唱」 (ベートーヴェン)	在京のバイオニア合唱団 と共演
2002年	1月13日	25周年記念演奏会	モテットOp.29,74(ブラームス) カンタータ150番,184番,39番 (J.S.バッハ)	指揮:佐々木正利 (東京バッハ・カン タータ・アンサン ブルと共演)
	10月4日	ライプツィヒ・バロックオーケストラ演奏会	カンタータ45番(J.S.バッハ) グローリア 二長調 (ヴィヴァルディ)	指揮:D.ティム (ライプツィヒ・ バロックオーケス トラと共演)
	12月3日	嶋海真希子さん追悼演奏会	ヨハネ受難曲から第39,40曲 (J.S.バッハ)	指揮:佐々木正利
	12月22日	久慈・こはくのまち第九演奏会	交響曲第9番「合唱」 (ベートーヴェン)	指揮:石川善美 東北大学交響楽団 久慈市民第九 合唱団と共演
2003年	11月30日	マタイ受難曲演奏会盛岡公演	マタイ受難曲 (J.S.バッハ)	指揮:H.ヴィンシャーマン (ドイツ・バッハゾ リステンと共演)
	12月5日	マタイ受難曲演奏会東京公演		

なおこのほかにも、クリスマス・チャリティー・コンサート、チャペル・コンサート、合唱祭、新春コーラスコンサートなどに参加、出演しています。

次回演奏会の予定

～日本におけるドイツ年、愛知万博で初来日～
シュレスヴィヒ・ホルシュタイン・アカデミー合唱団
《特別演奏会》



2005年4月15日(金) 午後7時開演
都南文化会館キャラホール

【指揮】

ロルフ・ベック

【ソリスト】

佐々木 正利

佐々木 まり子 ほか

【合唱】

シュレスヴィヒ・ホルシュタイン・アカデミー合唱団

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

【曲目】

メンデルスゾーン：「羊飼いの歌」〈混声4部・アカペラ〉

「おお雲雀」〈混声4部・アカペラ〉

シューベルト：「小夜曲」〈アルトソロ&女声4部・ピアノ伴奏〉

シューマン：「流浪の民」〈4声ソロ&混声4部・ピアノ伴奏〉

山田 耕 作：「赤とんぼ」〈混声4部・ピアノ伴奏〉

「ベチカ」〈混声4部・ピアノ伴奏〉

ブラームス：「ジプシーの歌」

「6つの四重唱曲」

「ドイツ民謡」より

シューマン：「スペイン歌曲集」

【主催】盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

【お問合せ】019-661-1614(渡辺)

◆合唱団出演者

【ソプラノ】

●赤塚 温子 阿久津 巴 荒田 奈美 五十嵐祐子 磯部真理子 大石 敦子
大嶋美奈子 大矢 克子 小笠原香澄 岡野美映子 尾友 佳子 菊池 節子
熊谷 充代 後藤 弘子 斎藤 純子 酒田 優子 佐藤 聡子 佐藤 美紀
志賀友加里 李沢 有希 高橋 美織 竹下 雪乃 ●田村いずみ 千田 絵未
千田 雅子 千葉明日香 奈良めぐみ 成田 茜 成田 和代 三原 佳織
村元 彩夏 矢幅 嘉子 横内 愛理 ○渡邊 絵美 ○渡辺真理子

【アルト】

阿曾 万里 大友麻紗子 ●小川 暁美 小川 暁子 小野寺洋子 ●菊池 葉子
桐原 絹子 児玉 尚美 齋藤 貴子 佐々木美智子 佐藤 公 佐藤 信子
柴田 映子* 杉本 絵美 鈴木 英美 ○高橋 温 高橋 祐圭 田口千紗都
武田 敏恵 多田 繭子 千葉ゆつき 平井 良子 廣瀬利津子 ○細田 彩子
水戸由貴子* 村上 殖子 茂木 容子 谷地畝晶子 渡辺しをり

【テノール】

伊藤 勝元 太田 穎則 小川 隆弘 ●鏡 貴之 ○柿崎 倫史 ★佐々木幹雄
中川 喜之 ○新山 隆健 西野 真史 沼田 臣矢 三原 正敏 ●吉村 哲

【バス】

赤塚 貴史 ●阿部 学 大友 拓磨 大宮 一弥* ★小原 一穂 佐々木直樹
高橋 聡 田沢 隆 千田 敬之 ○藤村 誠毅 戸来 百樹 ●横山 泉
吉田 俊彦 若林 敦盛* 渡辺 信之

指揮者：佐々木正利
伴奏者：剣持 清之

★ コンサートマスター
● パートリーダー
○ サブパートリーダー
* 仙台宗教音楽合唱団

マルコ受難曲演奏会スタッフ

マネージャー	トータル	渡辺信之（全般、印刷）	庶務	佐藤聡子・成田 茜
	チーフ	茂木容子（企画渉外）	受付	高橋 剛・小澤かおる
	サブ	荒田奈美（PR）	楽屋	原 穂波
	ステージ	田沢 隆（スケジュール）	事務局	佐藤 恵・佐々木聡子
会計	全般	赤塚貴史・大石敦子	印刷	三澤印刷
	チケット販売	尾友佳子・千田絵未	録音	IBC開発センター
渉外	オケ、ソリスト	田口千紗都	録画	近藤敏行・石垣美和・高橋和人
	予約手配	千田敬之・佐藤美紀	写真	田代 晃
デザイン	チラシ、ポスター	大嶋美奈子	宿泊協力	ホテルメトロポリタン盛岡
	プログラム	柿崎倫史	旅行手配	日本通運仙台旅行支店

